
てんかれっ！

緋色由衣

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

てんかれっ！

【Nコード】

N5402I

【作者名】

緋色由衣

【あらすじ】

可愛らしい容姿と性格を持つ祐介。
完璧に優れた能力と、完璧に墮落した性格を持つその兄達也。
達也の歪んだ愛情はやがて祐介を…。

BLではありません。

PROLOGUE (前書き)

なんか、小難しいあらすじですけど、内容はドタバタ性転換コメディです。

PROLOGUE

多くの平行世界の中にある、その1つの世界。

そこは魔法が存在する以外は特に地球と変わらない世界。

地球と同等の科学水準、そして世界の全ての人が魔法が使える。

ただし、魔法は基本的に平等に与えられる物、故に極々一部の人間を除き魔力の量そのものに差はない。

もちろん練度やセンスで個人差は出てくるが、最終的な魔力は同等なのだ。

しかし、10億人に1人の割合で桁外れな魔力を持つ人間が生まれる事がある。

人は彼らを神の愛し子と呼び、あるものは敬い、あるものは恐れ、あるものは憧れた。

なんにしても神の愛し子は誰にとっても特別な存在であり、世界中の注目をあびていた。

そしてとある国に世にも珍しい神の愛し子の兄弟がいた。

しかし彼ら兄弟は、特別扱いされる事を嫌い、自らの力を使い世界中から自分たちが神の愛し子だった記憶を消した。

これはそんな兄弟の日常をつづったものである。

PROLOGUE (後書き)

すいません、性転換は次回です。

(21)と書いて、ロリと呼ぶのが最も似合う男の野望(前書き)

遅くなりました！

いよいよ性転換です！

(21)と書いて、ロリと呼ぶのが最も似合う男の野望

達也「ふふふ…」。

いよいよ我が最大の野望がかなう時がやって来た！
とある部屋に非常に男らしい声が響く。

達也「あれもこれも十六夜殿のご協力あつての事。

ご協力感謝いたす、十六夜殿。」

なんか時代錯誤もはなはだしいしゃべり方だが、実際には、ただ臨場感を出そうとやってるだけだったりする。

十六夜「いやいや、礼には及ばんよ。

こんな可愛らしい寝顔の君の弟の驚愕に歪められた顔が見ただけだし。」

そして、臨場感なぞ関係ないとばかりな緊張感のカケラも無い女の子の声もエコーがかって響く。

達也「喜べ祐介！

お前は生まれ変わる！

この、グレイトな兄の手によって！」

翌日

祐介「なんじゃこりゃー！」

朝6時、祐介の絶叫が家にこだました。

祐介「なななな…、縮んでる…、というか幼くなってる…！」

そう、今の祐介の見た目は完全に小学校入学前の子供そのものだった。

祐介「というか、髪も心なしか伸びている気がする。」
心なしかどころか、髪の毛は伸びまくっていた。

もともと祐介の髪の毛は、ショートヘアの女の子くらいだったが、現在の祐介の髪の毛は自分の膝くらいの長さがあった。

祐介「一体なんでこんな事に……。」

そう言いつつも祐介には物凄く心当たりがあった。

達也「おはよう！」

マイブラザー！

いや、マイシスター！「このアホである。」

祐介「今回も貴様の仕業か……！」

当然だがご立腹の様子な祐介。

もともと華奢で女の子顔で声変わりしてもなお、ソプラノボイスだったので、周りからいつも女の子扱いされていた。

たとえば、体育の更衣室は女子用に毎回連行されそうになるのでそのたびに逃げ出し、男子更衣室を利用しようとすると、若さを持って余した男子に毎回襲われそうになるので、いつもトイレで着替えていた。

なお、トイレもどちらでもマズイというので来賓用のトイレを使用する事を義務づけられている。

達也「ふははははっ！」

そのとおり！

完全無欠のこの俺が、祐介！お前を美少女にしたのだ！」その時の達也は、何か大きな仕事をやり遂げた後のような爽やかな笑顔をしていた。

祐介「何故だ！？」

いくら貴様でも女性化させる事なんて不可能なはず！」
そうなのだ。

実は体を体形を変えたりする事は、物凄く魔力を消費する。

神の愛し子の達也であっても、せいぜい整形くらいしかできないはずなのだ。

達也「簡単な事だ。

魔法は制約をつければその威力は上がる。

その制約が強ければ強いほどにな。

だから祐介。

お前の体そのものを変えられるほどの制約をしたまでだ！」

祐介「そ…、そんな事が…。

それに制約って、なにをしたんだよ！」

達也「俺のした制約は、

カレーを一週間食べてはならない

だ！」

祐介「カレーに負けたのか僕の体は…。」

祐介の受難は続く。

(21)と書いて、ロリと呼ぶのが最も似合う男の野望(後書き)

次からぐだぐだ感全開で行きます！

お約束な買い物イベントは変態のせいで発生しません。(前書き)

今回は短いです。

お約束な買い物イベントは変態のせいで発生しません。

と、いうわけで、小学一年生くらいの女の子になってしまった祐介。祐介「なにが、と、いうわけでなんだ？

ていうか、今日学校どうするんだよ！

俺、いきなり『女の子になりました』って言っても誰も信じねえぞ
！」

達也「そうか？

俺はどちらかというと、『やっぱり女の子だったのか』と思われる
と思うが。」

祐介「……………」
どっちにしても嫌だった。

祐介「それに、服とかどうするんだよ！？」

俺、女の子の服とかもってねえぞ！」

持っていたら持っていたで問題だが。

達也「心配無用だ妹よ！

幼女の服をロリコンマスターたるこの俺が用意してないとも思っ
たか！？」

いろいろ問題のある人が用意してました…。

祐介「ここまで変態だったとは…。

俺はどうやら貴様の事をまだ甘く見ていたらしいな…。」
ガクツとうなだれる祐介だった。

お約束な買い物イベントは変態のせいでは発生しません。(後書き)

次回から学園編です。

登校しようとするオレの前に立ちふさがるペット達。(前書き)

更新遅くなって申し訳ありません。

祝PV3000突破！

有難うございます！

登校しようとするオレの前に立ちふさがるペット達。

早乙女家では、犬と猫を飼っている。

早乙女兄弟（兄妹？）がいろいろおかしいように、こいつらもいろいろおかしい。

と、いうか、早乙女兄弟よりおかしい。

何がおかしいかというところ、まずしゃべる。

猫の名前はヒロという。

こいつは妙ににやけ面で、不思議の国のアリスに出てくるチェシャ猫のようなにやけっぷりだ。

渋くて鋭い声（若本ボイス）でしゃべり、妙に毒舌。

しかも、都合が悪くなるとただの猫のフリをする、悪賢い猫だ。

犬の名前はヤスという。

犬の癖にアイパッチをつけ、何か将来有望そうな人が通る度に、

「拳闘しねえか？」

と、声を掛けて廻る、不気味過ぎる犬だ。

周りから通称、丹下犬と呼ばれている。

そんな一癖も二癖もある二匹が、朝登校しようとするオレの前に立ちふさがった。

ヒロ「よう、大将！（達也の事）なかなかキュートなガールを連れてるじゃないか。

しかし少々犯罪気味ではあるな。

いくら何でも小学校低学年の体にや、わが輩のリーサルウェポンは、反応しねえぜ？」

あの、ヒロさん…？

この小説は全年齢対象作品ですよ？

ヤス「ん…小僧！（祐介の事）

小僧はおらんのか!？」

ワシにまだ朝のあいさつもせんでどこに行きおった!？」

祐介（という名のロリ）「あいな…、オレが祐介だ！」

ヒロ・ヤス『ふーん…』

祐介「リアクション薄っ！

何なのさ！

そのリアクションの薄さは！」

ヒロ「そうはいうがなあ…。」

ヤス「身長が縮んで、髪が伸びた以外、何も変わらんしな。」

祐介「……………」

死刑。」

残酷な描写があります。

大変お見苦しい場面ですのでスキップさせていただきます。

少々お待ち下さい。

5分後…。

ヒロ「完全体につ…、完全体にさえなればっ…。」

ヤス「今度は死ぬかもね…（自分達が）。」

二匹のしかばねがあったとき。

登校しようとするオレの前に立ちふさがるペット達。(後書き)

次は定番の学園生活です。

登校風景（前書き）

いつの間にかPV4000突破！

こんな駄文読んで頂き有難うございます。

あと、基本的に投稿は日曜日か、雨の日になりそうです。

（職業配管工で、土方なんです。

イヤ、マジで。

…キノコで大きくなったりしませんか…。）

登校風景

現在登校中なのであるが…。

周りの声「おい！

なんであの小学生の女の子、うちの学校の制服を、しかも男子用を着ているんだ？」

『しかも達也さんの隣にいるって事は…

さらったのか！？

遂に達也さん犯罪に手を染めたのか！？』

祐介「普段周りからどう思われてるかよく分かるな、愚兄。」

皮肉を隠そうともしない祐介。

達也「ふふふ…。

周りの者達がなんと言おうと、俺は俺に正直に生きるだけだ。」

このアホには皮肉は全く通用しなかった。

祐介「時々、あんたがうらやましくなるよ…。

悩みなんかなさそうで…。」

もはや諦めの境地に至った祐介だった。

達也「ふふふ…。

そんなにほめるな妹よ！」

祐介「ほめてない…。」

テンション激減した祐介だった。

言い忘れたが、現在オレはすそ上げしたいいつもの男子用制服を着ている。

ハッキリ言おう！

似合わない！

小学校低学年の女の子が男子高校生の制服を着て登校なんてシュールな光景は、日常的にありえな過ぎる！

しかも、そのとなりにご近所で評判の変態が隣にいとゆう、犯罪の匂いがぶんぶんする恐ろしい光景がつ！

周りの！

周りの目が痛い！

痛い目で見られているのは主に隣の変態なのに、本人は至って平然としてるから余計に辛い！

やめて！

そんなに遠くからひそひそ話さないで！

いーやー！

登校風景（後書き）

こんな登校風景はイヤ過ぎますね…。

変態に権力を持たせてはいけません。(前書き)

やっと学校に来れました。

ここまで長かった…。

まあ、作者の進め方が遅いせいですけどね…。

変態に権力を持たせてはいけません。

…こうなる事は分かっていた…。
ああ…、分かっていたさ！

見た目が幼女になってしまった事を説明しに、オレは保護者変わり兼、実行犯として愚兄を職員室に連れて行った。

しかし…、しかしだ！

まだオレはコイツの事を甘く見ていたらしい。

なにしろ職員全員声を揃えて『達也さんのやってしまった事ならし
ようがない。』

祐介君、犬に噛まれたとでも思っただ諦めなさい。』

とほざきやがった。

教育者としての責務を果たせよ！

ていうか何で兄貴は職員全員から頭下げられてんだ！？

ブルルルッ！

携帯電話のマナーモードの音がする。

達也「うむ。俺だが？

なんだ総理大臣か…。

なんだ今良いところなんだ邪魔するな！

何？戸籍の変更の終了報告だと？

そんな事の為にわざわざ電話するなっ！

…ああ、分かっている、お前の趣味の女装中の写真をネットで流す
のは止めてやるよ。

ご苦労だった。

じゃあな！」

ピッ！

…本当にオレの兄は何者何だろう？

達也「まあ、そんな訳でお前はいつも通りに学校に通えるようになった。」

クラスも今まで通りだ。

俺のやるべき事は終わったので帰るが、襲われないようにするんだぞ。」

襲われそうな外見にした張本人が言うな！

達也「あと、これだけは言っておく。

俺の呼び方は、

お兄ちゃん・兄さん・お兄ちゃま・おにい・兄上・にいにい・にーに・お兄様・あにさまのどれでもOKだ！

好きな呼び方で呼ぶがよい！」

祐介「死ね！

貴様なんぞ愚兄で十分だ！」

そんなやりとりをした後、達也はテレポーターションして、家に帰った。

…テレポーターションするくらいなら、歩いて学校に来るなよ…。

変態に権力を持たせてはいけません。(後書き)

しばらく達也は直接は出てきません。

変態さんいらっしやーい！（前書き）

作者の気まぐれで投稿しました。
不定期すぎてすいません。

変態さんいらっしやーい！

1年5組、これがオレのクラスである。

このクラスの面々は実に個性的だ。

そう、腹立たしい程に個性的過ぎるんだ。

どれくらいかというところ、オレの愚兄並みの変人の集まりといえればわかりやすいだろうか。

その筆頭とも言える奴がコイツだ。

男「おはよう！諸君！

今日も良い天気だ！

きつとこれは今日こそ世界を我が手中に収めよとの神の啓示に違いない！

故に俺様は今日も全力でいかせて貰う！」

なにを全力でするのはわからないが、これがコイツ流の朝のあいさつだったりする。

コイツの名前は村上玄丈^{むらかみげんじょう}。

常日頃から世界征服を企んでおり、しょっちゅう行き過ぎた暴走をしているので毎回オレがそれを阻止している。

そのせいか、コイツはオレの事を勝手にライバル扱いしている。

確かにコイツの能力は凄まじく高い。

神の愛し子でこそないが、かなり高い魔力を持ち、五歳にしてあらゆる学問を収め、身体能力も陸上競技のオリンピック選手並みにある。

しかし、某あし〇ら男爵ばりの詰め甘さで毎回自爆する。

しかも捨てゼリフが毎回、

「おのれ〜！早乙女祐介！次こそは必ず！」

だったりするし…。

そしてその隣に居るのが玄丈の同志にして親友の大岩龍彦^{おおいわたつひこ}。

圧倒的な筋肉を持ち、玄丈をも凌ぐ身体能力を持つが、自他共に認

めるヲタクであり、ドMである。
端正な顔立ちも、202cmの長身も完全に間違った方向に使って
いる残念過ぎる男だったりする。
教室の扉を開けた途端、この2人と目があつたオレはどうしたらいい？

せんとくしをえらんでください

むしする

なかつたことにする

うえうえしたしたひだりひだりみぎみぎびーえー

こいつらのじんせいをりせつとする

玄丈・龍彦『まてまてまてえい！

おかしくないか！？

前提が間違つてないか！？』

うるさいなあ…。

玄丈「というか早乙女祐介よ！

貴様はいつからロリになつたのだ！？

俺様達の事を個人的と言うが、お前も十分過ぎる程個人的だぞ！

達也殿に負けぬ程に！」

祐介「アイツや貴様らと一緒にするな！」

その後祐介は玄丈と龍彦を蜂の巣にした。

まあ、2秒で復活するような奴らなのだが…。

変態さんいらっしゃーい！（後書き）

新キャラの2人。

変態すぎますね…。

しかし、さらに変態は増えていきます。

リトルグレイにリアルに遭遇したらみんなどんな対応取るかな？（前書き）

それにしても祐介の可愛らしい性格って設定どこにいったんでしょ
う？

多分多くの人がある設定忘れてると思います。

変態が集合したら弄ばれる祐介が可愛くなるので今しばらくお待ち
下さい。

リトルグレイにリアルに遭遇したらみんなどんな対応取るかな？

少女？「何やってるの？」

可愛らしい声が後ろからきた。

うん、声は可愛い、可愛いんだけど…。

祐介「おはよう立花さん。」

今日もアホ2人を粛正していたところだよ。」

オレは自分の後ろに立つ少女、いやリトルグレイに声をかけた。

彼女（？）の名前は立花たちばなつみ竜美。

こんな格好しているけど、一応人間らしい。

というかりトルグレイの格好は着ぐるみなんだけど。

極度の恥ずかしがり屋で素顔をさらすのが恥ずかしいらしい。

むしろその格好の方が恥ずかしいと思うんだけど…。

竜美「おや？」

ちみは誰だい？

見たところ祐介っちの妹か従姉妹と見たけど祐介っちに変態は兄貴

しかないから従姉妹なのかな？」

祐介「いや…、信じてくれないかもしれないが本人だ…。」

竜美「ふ〜ん、そーなんだー。」

信じた!?

え？何？そこ少しは疑うところじゃないの？

竜美「え？」

信じちゃうの!?

って顔してるね。

いやまあ、普通だったら信じないんだけど、髪伸びているけど顔そのまんまだし、性格も祐介っちだし、何より祐介っちには性格以外は完璧超人な変態兄貴が居るしね！

何が起きてても驚かないよ。」

またか！

また！あの変態のせいで納得されているのか！

一体なんなんだあの変態は！

竜美「なんでかあの人のやることだと納得できるのさ。」

というかはたから見たら可愛らしい声のリトルグレイと話しているのってかなりシユールな光景なんじゃ無いだろうか。

ていうか竜美さん。

あなた恥ずかしがり屋ってゆう設定じゃありませんでしたっけ？

竜美「素颜さらさなければ普通にいられるのだよ。」

私の素颜はどうしても周囲の目を引きつけるからね。」

…一度竜美さんの素颜見てみたいな！。

リトルグレイにリアルに遭遇したらみんなどんな対応取るかな？（後書き）

今回いかがでしたか？

感想、ご意見お待ちしています。

今回は祐介がいじられまくります(前書き)

タイトルの通り、祐介がいじられまくります。

ようやく祐介の可愛らしい性格という設定が生かされます。

今回は祐介がいじられまくります

祐介「いやあああああっ！」

竜美「んー

可愛くてうぶな反応

お姉さんいけない気持ちになっちゃうよ」

あー…。

何がどうなっているかを説明するとだな…、今現在オレはクラスの女子軍団におもちやにされているところだ。

祐介「やめる！」

やめてくれ！」

オレはそんなもの着る趣味は無い！」

オレは今、あるうことか体操服を着せられそうになっている。

しかもブルマだと？」

なんでそんな旧世代の負の遺産がここにあるんだ！？」

うちの学校、男女別の短パンだったはずだろ！？」

竜美「何でかって？」

それは何故か祐介つちのロッカーにブルマと体操服が置いてあったからなのさ！」何でオレのロッカーにそんなものが置いてある！？ん？なにやら置き手紙があるな…。

嫌な予感しかないが、オレは手紙を読んでみる。

はあーっはっはっはっはあっ！」

祐介よ！」

愛しのお兄ちゃんだ！」

グシヤ。

ここまで読んだだけで全てを理解した。

またか！」

また貴様の仕業か！」

と、紙が急に輝き出し、オレの変態愚兄の姿になった。

達也（？）『ふははははっ！

祐介よ！

お前が最後まで読まない事などお見通しよ！

その事を見越して俺の式神を説明用に用意しておいた。

それがこの俺だ！

今から説明してやるから感謝するんだぞ！

なんならお兄ちゃんの胸に飛び込んで…ぐぼあ！？』

祐介「やかましい！

貴様はいつたい何回オレの人生に影を落とせば気が済むんだ！？」

股間を殴られて悶絶している達也（式神）に祐介は容赦なく踏みつ

けを入れる。

しかし、体重が軽くなっているので踏みつけは全くダメージがない

ようだ。

達也（式神）「ぬふふふ…」

お兄ちゃんの背中を一生懸命ふみふみしている幼女！

萌える！」

ものすごく悶える達也（式神）。

祐介「気持ち悪い…」

思わず後ずさる祐介だった。

達也（式神）『ふむ、とりあえず話を進めようか。』

祐介「話をこじらせた張本人が何を言うか！」

達也（式神）『そんなささいな事は気にするな。』

まあ、ぶつちやけるとだな、ブルマを入れた犯人は俺の本体だ。

昨日の晩に学校に忍び込んで入れておいたのだ。』

祐介「理由はなんだ？

正直聞きたくないが一応聞いておく。」

達也（式神）『愚問だな！

可愛いものは正義だからだ！

見る！わざわざ体操服の上着にゼッケンを縫い付けたのだぞ！』

なるほど確かにゼッケンに、

さおとめゆづすけ

と書いてある。

達也『あと、兄からの手紙を読まずに破った罰として、お前にネコミミとシツポがはえるからあしからず。』

そう言った瞬間、祐介の頭にネコミミが、お尻から猫のシツポがはえてきた。

祐介「くくくくくつ！

死ねい！！！！」

達也（式神）『わははははっ！』

祐介の渾身の魔法を受け、達也（式神）は笑いながら吹っ飛んでいった。

祐介「悪は滅んだ…。

……………ん？」

先ほどよりはるかに興奮した目つきのクラスメイト達に襲いかかられた。

女子軍団『可愛い〜！

その耳とかシツポ触らせて〜！』

祐介「いやあああああっ！

もう嫌だ！

この体！」

このあと祐介は女子軍団に様々なはずかしめを受けたとき。

今回は祐介がいじられまくりです（後書き）

質問、感想、その他もろもろのご意見などお待ちしています。

諸悪の根源、宮小路十六夜登場！ (前書き)

今日はさほど疲れなかったので投稿します！

不定期連載でごめんなさい。

新キャラ登場です。

諸悪の根源、宮小路十六夜登場！

祐介「ちくしょ〜…。

なんでオレがこんな目にあわなくちゃいけないんだ…。

身長はただでさえ低かったのにさらに縮み、体は女の子になって、さらに屈辱的な事にネコミミにシッポまで生えてきた…。

すべてはあのアホのせいだ！

家に帰ったら肅正してやる…。」

ものすごく黒いオーラを出すネコミミ幼女という光景はなかなかシユールなもののかもしれない。

謎の声「にゅふふふ…。」

なかなか可愛くなっちゃったじゃないか！」

突如響き渡る謎の声。

祐介「にやつ！？」

誰だ！？」

シリアスな対応した祐介だったが、とっさに出した声が猫っぽくなつてしまい、雰囲気ぶち壊しになってしまった。

謎の声「おいおい、今の君の姿をそのように可愛らしくしてあげた張本人に向かつてなかなかにごあいさつじゃないか。」

そのセリフを聞いたとたん、祐介の雰囲気がガラツと変わる。

溢れ出る殺気を無理矢理押さえ込んでいるような重苦しいオーラを放つ祐介。

祐介「貴様か…。」

謎の君「ん？」

祐介「貴様かああああっ！！！！」

謎の声「おおっ！？」

この時、祐介は怒りの余り我を忘れて全力で突きを放った。

神の愛し子の全力の突きの威力はダイヤモンドすらやすやすと打ち砕く。

…まあ、堅いものは堅いだけ結果的に砕け易いのだが。

謎の声「はい、落ち着けー。」

祐介「ふみゆっ!?!?」

謎の声の主は祐介にデコピンを放ち、祐介を我に返した。

謎の声「全く…。」

今が私だったから良かったものの、他の普通の人間だったら死んでいるよ。

今の突きの威力、小さな大陸が吹き飛ぶくらいの威力あったからね。

「

いやいやいやいや、そんな突き軽々と受け止めちゃうあなたは何者ですか!?!?

謎の声「私の名前か？」

ならばお教えしよう!

私の名前はみやのこうじ いぎよひ宮小路十六夜!

異世界のかいおうがくえん魁皇学園の元生徒会長にして、あらゆる次元最強の一族の末裔だったりする!

あ、ちなみに君の兄君には幼女化の呪法の仕方教えてただけで、直接女の子にしたのは君の兄君だから」

祐介「しれつと言っなー!」

理由は!?!?

あんな呪法教えた理由はなんなんだ!?!?

十六夜「面白そうだから。」

祐介「それだけ…?」

十六夜「うん、それだけ」

聞かなきゃよかったと後悔した祐介だった。

十六夜「まあ、それはともかく君はこれからその姿で過ごさなくちゃいけないんだからもう少し身のふりかたを考えなきゃね。

あ、あと、身体能力も見た目相応になってるからいつも通りにやっていると痛い目みるよ。

その辺り考えて生活してね

じゃ、あでゆー。」

その言葉と同時に姿も気配も無くなった。

祐介「諸悪の根元にアドバイスされた…。

いつも通りだと痛い目見るか…。

なら攻撃する時は全力ですれば問題ない訳だ。

厄介な事になりそうだ…。

諸悪の根源、宮小路十六夜登場！
（後書き）

ご意見、感想とかお待ちしております！

キャラクター紹介 其之巻（前書き）

いつの間にかPV14000突破しました。
応援有難うございます！

キャラクター紹介 其之巻

名前 早乙女祐介さおとめゆうすけ

年齢 16

性別 男女

身長 145 96

体重 40 16

髪型 ショート ロング

好きなもの 平穩 友達 兄（実は隠れブラコン。ただしツンデレ
ぎみ。）

嫌いなもの 人ごみ 暴走した兄

好きな食べ物 甘いもの

嫌いな食べ物 苦いもの 辛いもの

特徴 神の愛し子

元々男なのが不思議なくらいの女顔だったが、達也の企みにより本当に女の子になってしまった哀れな主人公。
基本的可愛らしい性格をしているが、暴走した兄に対しては驚くほど辛辣になる。

なお、身長及び体重は作者が7歳の時を元にしてます。

だから平均より小さいと言わないで下さい。名前 早乙女達也おとめたちよ

年齢 21

性別 男

身長 185

体重 75

好きなもの 弟（現妹）をからかう事 ロリっ子

嫌いなもの ホモ 熟女 女の子を傷つける男

好きな食べ物 祐介 ステーキ ワイン

嫌いな食べ物 セロリ

特徴 神の愛し子

祐介の兄であり、真性のロリコン。

そしてブラコンでありシスコンでもある。

優れた術者であり、同時に体術の達人でもある。

詳細は謎だが、強大な権力を持っている。

追記 シス〇リの主人公が羨ましすぎて憎いらしい。

キャラクター紹介 其之壱（後書き）

これからも頑張ります！

仮面ライダーの戦闘員の存在意義における考察(前書き)

不定期連載でごめんなさい！

作者の気まぐれにお付き合い下さり感謝します！

仮面ライダーの戦闘員の存在意義における考察

玄丈「今日こそは世界征服の第一歩として、この学園を支配してくれる！」

行くぞ同士龍彦！」龍彦「ああっ！」

今日はなんかうまくいきそうな気がするぜ！」

玄丈「うむっ！」

なかなか心強い言葉だ！

今日という日を征服征服への足がかりとしてくれよう！

行け！我がしもべあぢまよ！」

あぢま「ギー！」

玄丈にあぢまと呼ばれた男、本名大久保大介が奇声を発しながら破壊工作を開始し始めた。

破壊工作と言っても黒板消しトラップや、バナナの皮などのたわいないものばかりだが玄丈は満足そうだった。

ちなみにこのあぢまという呼び名は祐介のペットのヒロがいきなり言い始めたのだが、名前の由来も意味もわからない。

しかし何故かその呼び名が広まり、あぢまこと大久保大介を本名で呼ぶ人間はいなくなった。

その内きつと住民票の名前もあぢまになっているだろうともっぱらの噂だった。

まあ、そんなこんなで非常にみみっちい破壊工作をしている玄丈一行だったが、そこに救世主が現れた！

祐介「やめんか！」

ゴスッ！ゲシッ！ゲシッ！ごりゅっ！

今のは、由衣の跳び蹴りが決まった後、空中でのアッパー、ハンマーパンチのコンボ、トドメのストンピングがあぢまに決まったところである。

あぢまは悲鳴を上げる間もなく気を失った。

しかしその表情は心なしか幸せそうだった。

玄丈「むうっ…。」

我がしもべあぢまはM体質だったのか…。」

祐介「いやいや…。」

つつこむところはそこじゃないだろ…。」

玄丈「しかも幼女に蹴られて喜ぶなどとさすがにフォローできぬ変態っぷり…。」

この村上玄丈！感服いたした！

あぢま！お前は2階級特進だ！」

祐介「もう何がなんなんだか…。」

とにかく世界征服だかなんだか知らないけど周りのみんなに迷惑かけるな！

あと、幼女ゆーな！」

玄丈「ならば幼女改めネコミミロリ少女よ。

貴殿の言いたい事は分かったが…。」

我々には世界征服という後には退けぬ野望があるのだ！

故にその意見への答えはNOだ！」

祐介「言いたい事はそれだけか？

もう面倒くさいから大技一発で決めさせてもらっよう！」

玄丈「むうっ…。」

なんたる凄まじい覇気！」

祐介の覇気に思わずすくむ玄丈。

祐介「悠久の時より来たれ創世の光。

無の大地の果てより来たれ滅びの闇。

今、光と闇が合わさり、全てを滅ぼす力を求む。

私の望むものを滅せよ『シャグナ・フロスト！』」

シャグナ・フロスト。

指定した空間を光以上の速度で動かし、消滅させる残虐無比な攻撃魔法。

普通、これを食らえばどんな抵抗もできず死ぬのだが…。」

玄丈「おのれ…、早乙女祐介！

次こそは…、次こそは必ず！」

変態には大ダメージを負わせる事はできても、滅する事はできない
ようだ…。

そして、玄丈達はあしゆらな男爵の捨てゼリフを吐き捨て去って行
った。

祐介「疲れる…」。

本当に疲れるよ…。」

仮面ライダーの戦闘員の存在意義における考察（後書き）

ご意見、感想などお待ちしております！

日陰さん、なにげさん、ご意見有難うございました！

お約束なモテモテイベント発動！ 前編（前書き）

いやはやいつの間にかPV18000突破してました。
こんな駄文を読んでいただきありがとうございます！
今回は少し長くなりますので前後編に分けました。
申し訳ございません。

お約束なモテモテイベント発動！ 前編

祐介「なんで…。」

なんでこんな事になったんだあああつ！」

オレこと早乙女祐介は16年の人生の中で、一番の魂の叫びを発していた。

なんでオレが魂の叫びをあげているかというところ…。それは3時間前までさかのぼる。

3時間前。

ピピピピピッ！

ガチャ！

祐介「眠い…、けど…、朝か…。」

現在AM6:30

オレは朝が苦手だ。

オマケに睡眠時間をきっちり8時間以上とらないとその日1日動きが鈍くなる体質なのだ。

しかも、この体になってから、夜の9時にはものすごく眠くなる体質になってしまった…。

まあ、そんなことあどーでもいい…。

問題は、オレのベッドの下に変態兄貴がいることだ！

祐介「なぜ貴様がここにいる！」

つーかなんで入ってこれた！

この部屋には最新の電子ロックにオレ自身のかけたマジックバリア

がかかっているというのに！」

そう、オレが変態に向かって叫ぶと、変態はこつほざきやがった。

達也「ひさびさの登場だというのにつれないなマイシスター！」

祐介「やかましい！」

質問に答える！」

達也「ふむ…。」

まあいいだろう。

まず、電子ロックはこれで突破した。」

そう言つて変態は1本の針金をとりだした。

祐介「最新型の電子ロックをどうやって針金1本で突破できるんだ

よ！」

達也「何を言う。」

世の中にはどんな扉も開けられる最後の鍵というアイテムがあるの

はお約束だ！」

祐介「ドラ○エ!？」

ド○クエなのか!？」

ていうか仮にあったとしてもなんで貴様が持っている！」

達也「作品上の都合だ！」

祐介「ぶつちやけた！」

達也「あと、マジックバリアを解除できた件だが、年を重ねている

分、俺の方が能力の扱いは上だという事を忘れてもらつては困るな

！」

祐介「ぐぬう…。」

そうだった…。

この変態は普段の言動こそアレだが、魔力の質、量共に今のオレを
桁違いに上回っているんだ…。

達也「さて…、今日も学校へ行くのだろう？」

そんなマイシスターにぐうれいとなお兄ちゃんからのプレゼントだ！

遠慮はいらん！

受け取るがよい！」

そう変態は言い放ち、パチンと指を鳴らした。
すると…。

オレはヒラヒラした黒い、ゴシックな可愛いドレスを着ていた。
…ゴスロリっていうやつか。

達也「うむ！」

流石はマイシスター！

それ以外の服装が想像できないくらいに似合っているぞ！

祐介「言いたい事はそれだけか…？」

達也「む…。」

なんだ？

なにやら寒気がしてきたぞ…。」

祐介「クククツ…。」

達也「あの…？」

祐介さん？

流石にこのヤバい空気に何か感じたらしく、冷や汗をかきながらお
ずおずと尋ねてくる達也。

祐介「オレは男だと何度言えば気がすむんだ！」

オレは魔力を極限まで高めた蹴りを変態にローリングソバット風に
放った。

達也「ありがとうございます！」

何故かお礼を言いつつぶっ倒れる変態。

まさかここまで変態とはな…。」

祐介「全く…。」

こんな服装で学校に行かせるつもりだったのか…？

オレは着替えるからな！」

こんな動きにくそうな服装はお断りだ！

…いろいろな人の目もあるし。

そしてオレは変態を部屋から投げ捨て、着替えようとしたんだが…。

祐介「アレ？

脱げない？」

何故だ！

何故なんだ！？

つまさか！？

またあいつか！？

達也「ふはははは！

そのとーり！

お前がすぐに服を脱ごうとする事などわかりきっておったわ！

だから今日の午後6時までその服は絶対に脱げないよう、あらかじめ魔法をかけておいたのだ！」

そこまで聞いたのち、オレは変態に先ほどの蹴りを15回連続で放っていた。

後ろの空間に、天の文字が浮かび上がる。…悪は滅びた。

達也「2秒で復活！」

祐介「おとなしく滅びてろ！」

…我が兄ながら疲れる…。

本当に疲れるよ…。

お約束なモテモテイベント発動！ 前編（後書き）

後編はなるべく早く投稿するつもりです。

本文のミスを指摘してくれた方感謝します。

本文修正しました。

プロローグが第2話と重なっていましたのでそちらも修正しました。
ご迷惑おかけしました。

お約束なモテイベント発動！ 後編（前書き）

いやはや、いつの間にかPV200000ってましたよ。

こんなアドリブ100%な小説がよくぞここまでこれたなど、感慨にふけております。

読んで下さった方感謝します！

そしてまだ読んでいないお方もぜひ読んでみて下さい！

まあ面白いかどうかは別として…。

お約束なモテモテイベント発動！ 後編

やあみんな、みんなのヒーロー祐介だ。

…ごめんなさい、調子乗りました。

現在、現実逃避中です。

だつてさ…。

みんな忘れてると思うけどオレは現在ネコミミはやし、ゴスロリドレス着て登校してるんだよ？

何？

このシユールな光景？

さっきから周りからもものすごく好奇心な目で見られている気がする…。

しかもネコミミがオレの意志とは関係なく勝手にピコピコ動くしさ

…。

ていうかさ…、さっきから目が血走った荒い息づかいのおぢさんが後ろから付けて来ているんだけど、そこはたとなく貞操の危機を感じるのは気のせいかな…？

もしかしてアレか！？

俗にいう閉まつちやうおぢさんてやつか！？

なんだかもものすごく怖くなったのでおぢさんを魔力の風で吹き飛ばした。

これで危機は去った。

…甘かった。

というか甘すぎた…。

さっき起こした風が実はオレのスカートまでまくり上げていたらしい。

オレの周りに大量の『大きなお友達』がつめよせてきた。
その中に見知った顔というかうちの愚兄が混ざっていたのは見なかつた事にしよう…。

とりあえず、全てまとめて重力を300倍にして押し潰しておいた。さすがというか、なんとというか、『大きなお友達』の皆さんは満身創痍ながらも普通に全員五体満足で無事だった。

うちの愚兄に至っては完全に無傷だったがあの愚兄なのでなにが起きてても驚かない。

だけど、無視だ無視！

ふう…。

やっと学校についた。

あの後、しつこくつきまとう愚兄に24回ほどお仕置きしといたけど、全く罪悪感がわかず、むしろ達成感すら感じるのはなんでだろう？

そんな事を考えながら教室に入ると…。

竜美「祐介っち発見！」

祐介「!?!」

なんでオレは教室に入って早々にリトルグレイに捕獲されているのだ？

現在のオレの状態は、ネコミミゴスロリロリ少女+リトルグレイという今までにないほどシユールな光景となっている。竜美「祐介っち、ここは危険なのさ！」

祐介「ちを狙っている獣達の教室という名の監獄なのさ！」

だから私と逃げるのさ！」

ふむ。

竜美さんは一応オレの事を心配してくれているらしい。

確かにクラスメートの目の輝きが尋常じゃない。

ていうか女の子達まで息づかいが荒いのは何でかな!?

ここには危険だ!

祐介「早く行こう竜美さん！」

「ここは危険過ぎる！」

竜美「おう！」

なのさ！」

こうしてネコミミロリ少女とリトルグレイの逃避行というかなりシ
ユールな（以下略）。

しかし、逃亡に障害がない訳もなく…。

玄丈「ふはははは！」

なんだか知らんがピンチのようだな早乙女祐介！

気の毒だが、この混乱に乗じて…」

祐介「だあああ！」

今はためえに構っている暇はねえ！」

えぶごお！」

玄丈「ぐはあああ！」

おのれ早乙女祐介！

次こそは必ず！」

今のは、オレが愚兄に放つ蹴りを玄丈の顔面に放ち、それがたまた
まクリティカルヒットして、玄丈がお約束な捨て台詞を言いながら
吹っ飛んでいったというわけだ。

…もはや、ばい〇んまん化してきたな玄丈…。

生徒達「祐介ちゃん！」

どこいるのー？」

達也「俺の妹か？」

探せえい！」

祐介の全てを自由にしたいなら！」

…こうして、祐介捜索班もとい、祐介ファンクラブができたのだっ
た。

…ていうか相変わらず復活早いな愚兄。

達也「お兄ちゃんと呼べ！」

祐介「人の心を読むな！」

生徒達「いたぞ！」

逃がすな！」

祐介「!?!」

「やあああああ！」

「なんでこうなっただなあああ！」

こうして、オレにとっては迷惑極まりないモテモテライフが始まったのだった。

竜美「達也さん！」

「私がアウエーになっちゃったのさ！」

「どうしてくれるのさ！」

達也「この小説に俺と祐介以外のキャラクターは不要！」

「このまま消し去ってくれる！」

竜美「ふっ！」

「そう簡単にやられはしないのさ！」

「…よそでよく分からないバトルが勃発していたが、どうでもよかったです…。」

お約束なモテモテイベント発動！ 後編（後書き）

前回の話のミスをご指摘して下さった方が達也を教祖として崇めた
いそひです。

皆さんも達也を教祖として崇めてみませんか？
ちなみに作者はお断りです。

魔法少女 ミルキー・ユー

元凶はやっぱりあの人です。

(前書き)

なんか最近キャラが勝手に動き回ります…。

特に達也…。

もう少し自重して…。

魔法少女 ミルキー・ユー

元凶はやっぱりあの入です。

真つ暗な空間に2つの人影がみえる。

1人は玄丈だが、もう1人は黒いベールが覆っており、顔が見えない。

何かを話しているようだ。

謎の声「またしても祐介めにやられたな！

玄丈將軍！」

將軍だったのか玄丈…。

玄丈「ハアツ！

面目ございません！

しかし…。

しかし次こそは必ず祐介めの息の根を…。」

謎の声「言い訳は聞きとらないわ…！」

バチッ！

謎の声の方から稲妻が飛び出てきて玄丈に直撃した。

玄丈「ギャアアアツ…！」

お許しをタ・ツイヤ様ア…！」

このタ・ツイヤって絶対あいつだろ…？

玄丈「ええいつ…！」

あれもこれもすべてはやつのせい…！！

おのれにつくき早乙女祐介…！！次の作戦で目にも見せてくれよ

うぞ…！！！」

…誰か止めてあげて…。

そんなわけの解らぬ前フリで今回の話も始まる。

達也「ゆーちゃんよ！

これを…、これを着るのだ！」

祐介「誰がゆーちゃんだ！

…ナンダコレ…。」

祐介が放心状態になるのも無理はない。

達也が持っている服は、某魔導師の造ったカードをぬいぐるみなマスコットキャラクターと共に封印する少女の、親友が毎回作ってきたような服だった。

…説明長くてゴメンナサイ…。

達也「おおっとゆーちゃん！

そーかそーか、気を失いそうになるほど嬉しいのか！

ならば早速着せてみよう！」

祐介「にやっ!？」

達也のふらちな雰囲気を感じ取ったのか、我に帰った祐介。「
なんでオレがこんな服を着なくちゃいけないんだよ！」

しごくごもつともなご意見。

しかし変態に理屈は通用しない。

達也「ふっ！

愚問だなゆーちゃん。

俺が着せたいからに決まっているだろうが！」

祐介「誰が着るかあっ!!!」

達也「一体何が不満なのだ！

この服は、俺の中の魂の寄りどころである、カードでキャプターな魔法少女の服装を参考にして俺が一生懸命造ったのに！」

祐介「全てに決まっているだろ！」

「つか、お前が造ったのかよ！」

達也「その通りだ！」

そしてゆうちゃん！」

お前はたった今から、魔法少女 ミルキー・ユーとして、悪と戦うのだ!!!」

祐介「全力で拒否する!!!」

だいたい悪ってなんだよ！」

そして魔法少女 の が恥ずかしすぎるわ!!!」

達也「心配ご無用！」

ミルキー・ユーと戦う悪の組織なら既に用意してある。

いつも世界征服を企んでいるクラスメイトがいるであろう？」

あいつは俺の部下として、日々世間を騒がせる。

そしてゆうちゃんがミルキー・ユーに変身して倒す。

完璧なプランではないか!!!」

祐介「毎日のオレの苦勞の元凶はやはり貴様か!!!」

ゆうちゃん魂の叫び。

達也「怒った顔のゆうちゃんかわいいーな」

あと、魔法少女のマスコットキャラクターも用意してある！」

そういつて連れて来たのはペットの猫のヒロと犬のヤスだった。

祐介「……………」

なあ、兄よ…。

本当にコイツらがマスコットキャラクターになるのか？」

なんかどちらも小さな子供が見たら泣き出しそうな外見なんだが…。

そもそも若○ボイスのいやらしい目つきの猫と、アイパッチつけて

ボクシングにのめり込む犬をマスコットキャラクターにいた魔法少

女なんて前代未聞じゃないのか？」

達也「ならば我々がその第一歩となればいい！」

では、プラン魔法少女ミルキー・ユー始動だ！」

祐介「オレは納得してねえ！」

しかし祐介の叫びは誰も聞いていなかった。

達也「はあーはっはっはっ！」

あとがきはこの早乙女達也が乗っ取ったあ！」

祐介「いやいや…、もう少し謙虚にいけよ…。」

達也「何をいうゆうーちゃん！」

これは我々小説の本編にしか出番のない架空の人物があとがきといえ本編からの解脱を行う偉大なる一歩なのだぞ！」

祐介「はいはい…。」

んで、あとがき乗っ取って何するの？

まさか無計画に乗っ取っただけってわけじゃないだろ？」

達也「……………」

うむ！

ちゃんと理由はあるぞ！」

祐介「なんだ今の間は…。」

達也「この、あとがき改め、達也なお部屋ではてんかれっ！における設定や、読者様からの質問に答える場だ！」

故に疑問に思った事があつたらどしどし応募してくれ！

作者のどーでもいいやる気にも火がつくだろっうからな。

すぐに消えるだろっうがな。」

祐介「いやいや、消えちゃダメでしょ！」

達也「致し方あるまい、あの作者だぞ。」

祐介「あの作者じゃしょうがないか。」

なんか納得された！

魔法少女の登校風景。(前書き)

ついにPV27000突破!

これも読者様のおかげです!

ありがとうございます!

魔法少女の登校風景。

達也「ふははははははは！

行くぞゆーちゃん！

いや、魔法少女 ミルキー・ユーよ！」

唐突ですがこんにちは、早乙女祐介です。

今現在の状況を説明すると、オレは今、魔法少女 ミルキー・ユーのコスチューム（と、うちの愚兄が言っていた。

ちなみにコスチュームの数は星の数ほどあるらしい。）を身にまとい登校中だ。

ここでオレの名誉の為にいつておくが、オレは全力で抵抗したさ。

ああ…、全力でな…。

しかし、奴にはうくら攻撃しても通用せず、むしろ喜んでいた。

あの気持ち悪い笑顔はトラウマものだった…。

しかも反撃はオレを辱める攻撃ばかりだったし。

結果、オレは精神的HPが0になり、こんな格好で出歩かなくては
いかなくなつた訳だ。

ううっ…。

恥ずかしすぎて死にそうだ…。

あっちの妙齡の奥様方はこっちをみながらひそひそしてるし、ご年配の方々も例外なくこちらをこらんなられる。

そしてこ〇つくパ〇ティーに出てくる縦さんと横さんみたいな人達が写真撮りまくってきた。

あまりの恐怖に勝手に涙が出てきたZE

その時愚兄が動いた。

達也「！？

ゆーちゃんが泣いてる！？

うおのれ貴様ら、成敗してくれる！」

いつになく真剣な表情でどこぞの侍にでもなつたかのようなしゃべ

り方をする愚兄。

ヤバイ！

あれは愚兄が本気でキレた時の反応だ！

このままだとア○シズが落下するよりもひどい災害が起きてしまう。そんな心配をくみとったのか、愚兄は語りかけてきた。

達也「安心するんだゆうーちゃん。

周りには極力被害出さない術でかたをつける！」

そう言っつて詠唱を始める。

達也「ザーガード・ザーガード・スクロード・ロード……」

祐介「その呪文は止めんか！

著作権的にもヤバすぎる！」

あんたはどこのダーク・シュ○イダーだよ……。

だいたい、作者の趣味丸出しなネタを堂々と使うんじゃない！

なんて事をやっているうちに……。

キーンコーンカーンコーン……。

ヤバ！

予鈴鳴ってる！

後5分で門が閉まってしまおう！

あの門には白銀の風紀委員と呼ばれる結女先輩ゆめがいるってのに！

あの人にはどうやっても勝てる気がしない！

急がなきゃ！

オレは文字通り全力で走った。

今の俺はマツハ5くらいで走っていた。

衝撃波を魔力で消しながら走るのは疲れるな。

努力のかいあって、なんとかオレは間に合ったのだった。

魔法少女の登校風景。(後書き)

今回は特に質問とかなかったたので達也による説明はありません。

白銀の風紀委員 (前書き)

新キャラ登場。

作者はお気に入りだったりします。

白銀の風紀委員

白銀の風紀委員。

圧倒的に強い戦闘能力と正義感で学校の平和を守る正義の使者。

ただしあくまで一般生徒が自力で解決できない事件が起きた時などの、やむを得ない場合にのみ動く、学校の守護神である。

その守護神の名前は水口結女^{みづぐちゆめ}。
長く、真つ直ぐな黒髪。

何故か制服を着ず、一日中袴で過ごし、治安維持と護身用のために常に木刀（銘　夕凧）を持って過ごす、でも背は低く、目測145cm程度で、ロリキャラであるが、なんかこの人が一番危ないんじゃないかと思われそうな人である。

自分にも他人にも厳しい反面、誰にでも偏見を持たずに親身になつて接してくれるため男女問わず人気は高く、本人非公式のファンクラブが存在する程である。（男女比　男3　女7）

結構な人数が彼女に魅力を感じている一方で、取り締まりの厳しさから不良達からは極度に恐れられている。

彼女は決して不正を許さない。

そして今回、許されざる不正の塊が目の前を通り過ぎようとしていた。

祐介「ふう〜…。

間にあつたあ…。」

許されざる不正〃祐介

結女「何が間にあつたのかな…？」

祐介「にや？」

何やら背後から寒気がしたので祐介は後ろを振り向いた。

そこにはスーパーサ○ヤ人のようなオーラをまとった結女がいた。

結女「その小学生！」

どのような理由あつて我が校に来たのだ？

しかもそのような破廉恥な格好しながら登校とは、親の顔を見てみたいものだな。」

威圧感たっぷり、皮肉たっぷりに話す結女。

祐介「親？」

もう死んじやったからいないよ。」

そう言うつと結女は雷にでも撃たれたかのような衝撃を受けていた。

結女「すまなかった…。」

知らぬ事とはいえ、君の心をえぐるような事を言ってしまった…。

おわびとってはなんだが、君を学校まで送り届けよう。

学校はどこだ？

私の足なら半径50km以内なら2分でつくぞ。」

いったいどんな足しているんでしょうか？

祐介「学校は…。」

ココ。」

結女「え？

なんだ？

何やら空耳が聞こえたのだが…。

すまない、もう一度言ってくれないか？」

祐介「だからあ…。」

ココ！

この学校なんだってば！

あと、オレは小学生じゃなくて高校生だったの！」

結女「バ…、バカな…。」

祐介「バカって言うなあ！

バカって言った方がバカなんだぞ！」

結女「あれか？

あれなのか？

あず○んが大王みたいな飛び級なのか？」

意外とアニメに詳しいもよう。

祐介「飛び級でもなんでもないやい！」

うちの愚兄のせいでこんな姿になっただよ！」

そのセリフを聞いて結女は何かを考えるそぶりをみせ。

結女「失礼だが君の名前は？」

祐介「早乙女祐介。」

結女「あの早乙女祐介か！」

と、いうことは君の兄というのは…。」

達也「言うまでもなくこの俺だ！」

紹介が遅れたな。

俺の名前は早乙女達也。

達也さん、達也ちゃん、たっちゃん、たっちー、なんならお兄ちゃんなど、好きに呼んでくれ！」

達也は基本女の子には優しい。

その分、男の扱いはかなりぞんざいだが（例 玄丈）。

結女「噂にたがわずかなりの変わり者みたいだな。」あれを変わり者ですませますか…。」

達也「先ほどまでは何やら面白そうなのでその草むらから一部始終を見せて貰った。

なかなかどうして得難い人材のようだ。

どうだ？

我々と一緒にゆーちゃんをいぢり倒さないか？

ついでに世界征服も企んでみたり。」

ついでなんだ！？

世界征服ついでなんだ！？

結女「いや…、私は…。」

さすがの結女も達也のハイテンションっぷりにたじたじのようだった。

達也「ふむ。

すぐに返事を貰おうとは考えてはいない。

名刺を渡しておく。

興味があつたら連絡するといい。」

そういつて結女に名刺を渡す。
そこには

株式会社 米森真教

代表取締役早乙女達也

とあった。

世界征服目指しているの株式会社なんだ！？
ていうか米森真教って何！？

この名刺、うさん臭さすぎるよ！。
達也「ぢゃ、俺は帰るぞ。

ゆーちゃん、しっかりと勉強にはげむのだぞ。」
そう言つて達也は去つて行つた。

結女「……………」。

教室に行くか……。」

祐介「そうですね……。」

2人はものすごく疲れた顔して校舎の中に入って行つた。

白銀の風紀委員（後書き）

米森真教に入りたい人はご連絡下さい。
ご意見、感想、批評などお待ちしています。

見回り幼女（前書き）

なんと！

まさかのPV32000、ユニーク5000突破しました！

なにげに作者が一番驚いています。

いいのかなー…。

なんか悪いことしてるわけじゃないのに、申し訳なってくるなー…。

こんな作者と小説ですけど、これからもおつきあいしていただけたら幸いです！

見回り幼女

祐介「1つ聞いて良いかな？」

結女「なんだ？」

私の答えられる事なら何でも答えてやるぞ。」

祐介「なんでオレはこんな事をしなくてはいけないのですか？」

結女「それは君が騒ぎを起こす元凶だからだ。」

祐介「むしろオレ巻き込まれている方じゃない!？」

いや、まあ…、10000歩ゆずってそれは良いです…。」

結女「納得いかないと言う顔だな。」

そんな風に我慢していると将来胃に穴があくぞ。」

祐介「もし開いたら確実にうちの愚兄が原因ですけどね…。」

つて、そうじゃなくて!

なんでオレがこんな恥ずかしい事をしなくてはいけないんですか!？」

こんな唐突な始まり方で(いつもの事だが)読者の皆さんは首をか
しげているだろう。

現状を説明させて頂くとオレは今、風紀委員の見回りとやらをやら
されている。

なんでも、騒ぎの中心にいるオレ自ら風紀委員の仕事を手伝う事によつて周りの人達の暴走も抑制されるだろうと結女先輩はふんだら
しい。

それはいい。

それはいいんだけど…。

見た目小学校低学年以下の女の子が、ネコミミ生やして、めるへんちつくな衣装を着ているというのはかなりシニールな光景ではない
でしょうか？

しかし、それ以上に、この姿を不特定多数の人達に見られるつてのが嫌すぎる!!

結女「何を言う。」

特にやましい事はしてないのだから堂々としておけば問題ない。」
祐介「できるかああっ！」

さっきからじーっと見られたり、ヒソヒソ話されたり、血走った目で見られたりろくな事がないわ！」

そう、オレはさっきからこんな恐ろしい目にあっているのだ。

ていうか、ヒソヒソ話とかより、血走った目で見てる野郎共の方が多かったのは問題だと思う。

この学校の男子生徒はみなロリコンなのか！？

そんな事考えていると…。

結女「むっっ！」

ふらちな気を感じる！

こっちの方で校則違反をしている者達がいる！」そんな事まで分かるんかい！？

ていうかふらちな気を感じられるんだったら、このオレの周りにたつぷりである野郎共の乱れきった気には気づかないんでしょうか？

これはアレか？

木を見て森を見ずってやつなのか？

そんな事を考えている間にも結女はオレを引っ張られながら移動していた。

というかオレさっきから宙に浮いているんですけど

そうこうしているうちに、現場に着いたもよう。

結女「貴様らあ！」

いったいここで何をしている！」

そこには…。

達也「さあ！」

よってらっしやい、見てらっしやい！

今回限りゆーちゃんの寝顔の服はだけver.の写真が一枚500円だよ！」

大量の男子生徒（一部女子）相手にオレの隠し撮り写真を売りさば

く、うちの愚兄がいた。

…またコイツか…。

もう、何も考えずにぶっ飛ばしてもいいかな？

いいよね？

達也「ん？

ゆーちゃんいつたいこんなところで何をしているのだ？」

祐介「それはこっちのセリフだ…。

いつたい貴様は何をしている？」

達也「見て分からんか？

ゆーちゃんの写真を売りさばっているのだ！」

祐介「ほう…。

何が目的だ？」

達也「しれたこと。

ゆーちゃんの可愛らしさをもっと多くの人に知って貰おうと思ってな！」

祐介「さすが昔オレを落とす穴に落として、困った顔を見る為だけに三日三晩不眠不休で穴を掘り続けた男の考えはオレの思考のはるか斜め上をいくな。」

達也「ふはははは！」

そう、ほめるな！

てれるではないか！」

祐介「言いたい事はそれだけか？」

達也「ゆ、ゆ、ゆ、ゆーちゃん？」

なんか雰囲気か雛○沢症候群Lv5に発症したみたいだぞ…。

ていうか、その両手に集まっている凄まじい魔力は何かな…？

祐介「裁きのいかずち

とりあえずここにいるみんな同罪だから」

達也「こんな時ばかり可愛く言っても恐いだけだから！

ゆーちゃんのお仕置き痛いから嫌ー！」

祐介「KILL YOU BUSTER（和訳 ぶっ殺す）？」

ぢゅごおおおん!!!
達也「ゴツパアアア!

これまでか!

しかし、忘れるなゆーちゃん!

俺は必ず蘇る!

この世に欲望がある限り!」

祐介「どこの三流悪役だよ!

おとなしく滅びている!」

そんなやりとりの後:

結女「ちよつといいか...?」

祐介「んにゃ?

なに?」

結女「この状況、どうするつもりだ?」

現在の状況は、祐介の放った裁きのいかずちの影響で無数の男子生徒達（なにげに祐介はフェミニストなので女子生徒は無傷）が死屍累々といった感じだった。

祐介「てへ?

やりすぎちゃった?」

結女「それですますつもりか?」

祐介「やつぱり...、ダメ?」

結女「うぐっ!（可愛い!」

この笑顔の前にはすべての悪事を許してしまいそうだ!

落ち着け!」

落ち着け私...」

私はノーマル...、ノーマルなんだ...!」

それにここで屈したら、天に召された男達が報われん!? 死んでません!」 結女「男子生徒達は自業自得とはいえ、校内であれほどの魔法を使ってしまったからな。

せめて反省文を書いて貰うぞ!」

祐介「は...い...」

まあいつか…。

悪は滅びたし。」

しかし、あの男があっさり滅びるわけもなく…。

達也「ふつかあああつ！」

祐介「蘇った!？」

そんな!

今回は絶対に復活できないようにすべてを原子レベルまで破壊したのに!!!」

結女「早乙女祐介…。

恐ろしい子！」

達也「さすがの俺も原子レベルまで破壊されたら復活に3分もかかってしまった。」

祐介「すべてを原子レベルまで破壊してもカップめん作る程度の時間で復活できるのかよ…。」

達也「だから言っただろう？」

必ず蘇ると！」

祐介「そうだとしても、もう少し時間かけようよ…。」

達也「そんなことしたらゆーちゃんに会えないではないか！」

祐介「もうやだ…。」

この兄貴…。」

見回り幼女（後書き）

やっぱり達也は永遠に不滅ですね…。
祐介…ドンマイ…。

達也の冒険〜朝の活動編〜（前書き）

皆さんクリスマスはいかがお過ごしでしたか？

作者は恋人いない歴3年なので家族と過ごしました。

恋人ほしいよ〜！

などと愚痴いっても始まりません。

達也のごとくポジティブシンキングで行かなくては！

達也の冒険〜朝の活動編〜

今回は達也視点でお送りします。

ふはははは！

みんなのヒーロー達也さんだ！

今回は俺の視点から見たゆーちゃんの日常をお送りしよう。

某日 早朝

今日も俺は夜明け前に目が覚める。

なに？

なぜこんなに早く起きるかだと？

しれたこと、今日もゆーちゃんをからかって遊ぶ為だ。

ゆーちゃんはもともと女の子より可愛い男の娘だったが、やはり女の子になってからさらにみがきがかかったようだ。

やはりゆーちゃんは完璧だな。

可愛いらしくて、からかいがいがあつて、なおかつ幼女！

ああ…、これ以上何を望む事があるだろう…。

桃のような肌に、滝のようにまつすくな髪、熟れた杏のように紅い唇。

これだけでなく（中略）で、だけでなく（後略）ゆえにゆーちゃんは至高の美なのだ！

この美しさを独占するためだったら、古今東西の誰もが国すら売るだろう。

…前置きが長くなった。

とにかく、俺がゆーちゃんをからかう為に10年以上まえから夜明け前に起きる習慣があるのだ。

まあ、今はそれだけではないのだが…。

話しすぎた。

今のセリフは忘れてくれ。

ともかくにも本日のミッション・スタートだ。

ジ…。

こちらス〇ーク。

次の指示を頼む！

などと言いたくなる気分でゆーちゃんの部屋に侵入する。

ドアを開けたとたん、大量の刃物が俺の上空に降り注いだ。

ふむ…。

とてもよく手入れされているな。

それこそ刃物の先に虫が止まっただけでその虫が真つ二つになりそうなくらいに。

はっはっは…。

ゆーちゃん？

さすがにやりすぎでないかい？

正直、毎日同じ畏仕掛けてるみたいだけど、日ごとに刃物の数ふえてるよね？

今回間違いなく3ヶタ突入してるよね？

オマケに誘導魔法までついてるし…。

さすがにあたつたらチョッピリ痛そうなので、誘導魔法を消去しておく。

これで安心…。

ズシヤツ！

は…？

ザクツ！ドスウツ！バシユウ！

はっはっは…。

慣性の法則をすっかり忘れていたよ。

そんな事言ってるうちにもどんどん刺さってくる刃物×100
達也「ギャー！！！！」

今のは痛かった…。

痛かったぞー！

まあ、2秒で復活したからいいけど。

というかゆーちゃん。

これだけの騒ぎが起きてるのに熟睡って、寝つき良すぎだよな！

まあ、俺的にはそっちの方が都合いいけど。

今度こそゆーちゃんの寝顔を…。

ん？

なにか光ったか？

あれは！

書籍 全国ちびっ娘大運動会ブルマ編！
クリスタルタイプ

なぜこんなレアアイテムがこんなところに！

俺ですら通常盤しか持っていないというのに！

これは俺に対する神の掲示か！？

この瞬間、俺の頭にアーモンドのような種が降りてきてパチンとは
じけた。

うおお！

今の俺を止められるものは全国の少女だけじゃあ！

そうして、書籍 全国ちびっ娘大運動会ブルマ編を手に入れた。

瞬間、ガタンと上から巨大なカゴが落ちてくる。

む…。

このカゴ、魔力を無効化するオリハルコンで出来ているのか。

これでは俺も出る事ができんな。

まてよ…、出れない？

なんとという事だ！

ゆーちゃんの愛らしい寝顔を前に指をくわえて見ていると言っのか！

これでは蛇の生殺し状態ではないか！

あれ？

ゆーちゃん起きたの？

気のせいかな？

ゆーちゃんからものすごくまがまがしいオーラを感じるんだけど…。

え？

オレの眠りをさまたげるものはなんぴとたりとも許さん？

えーと…寝ぼけてますねゆーちゃん。

でもさ、寝ぼけながら魔力こっちむけるの止めてくれない？

だから…、こっち向けちゃダメだって…。

カッ！

ゴオオオン！

結局俺のゆーちゃんの寝顔を見る作戦は今日も失敗した。

明日こそは…、明日こそは必ず！

達也の冒険〜朝の活動編〜（後書き）

達也編はギャグしかない予定です。

達也の冒険〜達也とペットのやりとり編〜(前書き)

明けましておめでとございます！

今年もよろしくお願いします。

昨晚の紅白最高でした！

嵐初登場！

よかったなあ…

趣味丸出しでゴメンナサイ。

今回も達也がメインです。

達也の冒険〜達也とペットのやりとり編

達也「ぬう…。

まさかあのようないがあらうとは…。」

はっはっは！

待たせたな諸君！

あのあとなんとか自力で脱出に成功した達也さんだ！

だが、あの罠からの脱出に3時間もかかってしまった。

しかも餌として置いてあった書籍 全国ちびっ娘大運動会ブルマ編

クリスタルタイプ

も表紙をコピーしただけのダミーだった…。

ふふっ…、ゆーちゃんよ…。

今回はまんまと踊らされた訳か…。

だが、これで俺が諦めるなどと思わない事だ！

俺はゆーちゃんをいぢりまわす為ならどんな試練や苦痛にも耐えて

みせる！

む？

なんと！

もう7時ではないか！

いかん！

危うく毎週欠かさずみている「カードマスターざくろ」を見逃すと

ころであつた！

きつちりDVDに録画予約はしているが、やはりリアルタイムで見

なくてはな。

7時半にはゆーちゃんも学校に行くからちょうどいいしな。

今行くよ！

ざくろちゃん くう…。

くうううっ…。

うらやましい！

うらやましすぎるぞゲロちゃん！

あのような幼女の関心を引きそうな姿になって、なおかつ一緒にお風呂だとう！？

俺にもその幸せを10分の1でいいから分けてくれ！

と、もう7時半か。

そろそろゆーちゃんが登校する時間だな。
ならば俺もいろいろと準備をしなくては。

達也「ヒロ！

ヤス！

俺の部屋にこい！」

二匹のペットに思念を送る。

ヒロ「むう…。」

面倒臭いな…。」

ヤス「なんで俺達に変態に付き合わなくちゃいけないんだ。」

…この二匹には教育が必要なようだな…。

達也「死ぬほど辛い目に合うのと、死ぬのがまだ幸せに感じるほど痛めつけられるのとどちらがいい？

好きな方を選ばせてやるう。」

ヒロ・ヤス「ごめんなさい。」

私達が悪かったデス。」

達也「分かればよろしい。」

早く俺の部屋にこい。

話がある。」

ヒロ・ヤス「Yes・ser！」

脅し過ぎだな。

態度が急変したぞ。くう…。

くうううつ…。

うらやましい！

うらやましすぎるぞゼロちゃん！

あのような少女の関心を引きそうな姿になって、なおかつ一緒に風呂だとう！？

俺にもその幸せを10分の1でいいから分けてくれ！

と、もう7時半か。

そろそろゆーちゃんが登校する時間だな。

ならば俺もいろいろと準備をしなくては。

達也「ヒロ！

ヤス！

俺の部屋にこい！」

二匹のペットに思念を送る。

ヒロ「むう…。」

面倒臭いな…。」

ヤス「なんで俺達に変態に付き合わなくちゃいけないんだ。」

…この二匹には教育が必要なようだな…。」

達也「死ぬほど辛い目に合うのと、死ぬのがまだ幸せに感じるほど痛めつけられるのとどちらがいい？

好きな方を選ばせてやろう。」

ヒロ・ヤス「ごめんなさい。」

私達が悪かったデス。」

達也「分かればよろしい。」

早く俺の部屋にこい。」

話がある。」

ヒロ・ヤス「Yes・ser！」

おどかし過ぎたな。

態度が急変したぞ。

と、いうわけでヒロとヤスの二匹は俺の部屋にやってきた。

ヤス「それで話とはなんだ？」

ずいぶんと真面目に聞いてきたな。

全く、これだから根が真面目な奴は…。

真面目な話なんぞ俺も読者も期待しとらん！

ここはあえて俺が話をひっかき回さなくては！

…なんか今どこからか「いつもと変わらねえ」とか声が聞こえてきたが気のせいだろう。

達也「それはだな、今からゆーちゃんが登校する時間だから俺はいつもどつり後をつけるのだが、今日はサッカー中継で番組予約がずれそうだからそれをきちんと録画しておいて貰おうと思つてな。」

ヒロ「てめえが一番不真面目じゃえかあああ！」

ぶらあああ！」

達也「ええい！」

やかましい！

若○ボイスの猫の癖にデカイ声を出すな！」

ヒロ「動物差別反対！」

我々は断固抵抗する！

自由の為に！」

達也「愚民共は黙っている！」

我ながらわけの分からぬ言い争いをしていたが…。

ガラッ…。

急に部屋の扉が開いた。

祐介「世の中には動物と本気で言い争いをする人間もいたんだな愚兄。」

オレの中の貴様への評価がまた1ランク下がったぞ。

後、近所迷惑だ。」

達也「ゆ、ゆ、ゆ、ゆーちゃん？

ひよっとして怒ってる？」

祐介「そりゃあ、朝起きてそうそう仕掛けておいた罠の中でもがき続ける愚兄の姿を見せられ、さらにペットと本気で言い争いしてる

愚兄の姿を見たらな…。」

達也「ゆーちゃん！

誤解だ！

話を聞いてくれ！」

祐介「貴様と話す事など何もない。

じゃあ俺は今から学校行くからな。」

バタンツ！

達也「ゆーちゃああああん！」

ヒロ「兄への評価がまた一段と落ちたな。」

ヤス「どこまで落ちるか見ものだな。

賭けないか？」

どこまでも薄情なペット達だった。

達世の冒険〜達世とペットのやりとり編〜(後書き)

皆さんペットは大切にしましょう(笑)。

達也の冒険〜タ・ツーヤ参上!編〜 (前書き)

すみません!

更新遅くなりました!

今回はパロディ色濃いめです。

達也の冒険〜タ・ツイーヤ参上！編〜

達也「ぬう……。」「

おはよう諸君！

今回は少々テンションが低い達也さんだが、心配無用だ！

ただ、ちよつと朝から失敗繰り返してしまったからちよつぴり落ち込んでしまっただけなのだ。

達也「まあいい。」

過去は振り返らぬ主義だ。

次こそはうまくいくに違いない！」「

達也さん復活！

どこからか反省してないだけとか聴こえてきたが気のせいだろう。

達也「ん？

なんともうすぐ8時ではないか！

こうしてはおれん！

ゆーちゃんを追いかけなくては！」「

と、その前に……。

ゆーちゃんの学校行くなりゆーちゃんにバレないように、悪の大元帥、タ・ツイーヤに変身しなくてはな。

バツ！

シャツ！

ガシイイイン！

タ・ツイーヤ「ふはははははは！

悪の大元帥、タ・ツイーヤ参上！」「

タ・ツイーヤに変身した俺は悪役そのものな格好している。

玄関から出た瞬間、小さな子連れの母親に遭遇。

男の子「ママー。」

あのひとギラギラしたふくきてるー。」「

母親「シッ！

目を会わすんじゃないやありません！」

タ・ツイヤ「ぐふっ…。」

…さすがに若干傷ついたな…。

この格好だと目立ってしまふな…。

でも、俺はタ・ツイヤとしてはこの格好で行動してるわけ…。

………人見た目だけでは判断できないよね？

ならば俺も外聞を気にせずこの格好で堂々と行動しようではないか。

ん？

なんと！

前方にゆーちゃん発見！

ちようちよを追いかけてるな…。

恐らく俺の付けた猫セツトの影響で行動が猫っぽくなったのだから…。

はつきり言つて可愛らし過ぎる！

その姿は見るもの全てを和ませるだろう。

ていうか俺の正体ばれないよね？

………まあ大丈夫だろうけど。

なにしろ俺の変装はばい〇んまん並みに完璧だからな。

我ながら自分の色を完全に消せたな。

お？

なんかゆーちゃんにいかにもなオタクなおっさんが声をかけているな。

片手にグルグルキャンデー持っているって事は餌づけするつもりか。

甘い！

甘過ぎる！

ゆーちゃんにはそれがチョコレートだろうとケーキだろうと通用しない！

俺もそれで失敗したからな！

おや？ゆーちゃんが反応している？

何故だ！？

何故俺には反応しなかったのにそんなロリコンおやぢに反応するんだ！？

…ってゆーちゃんが反応してるのは奴の持つてるキャットフードのモ○プチにか！

ゆーちゃん…。

身も心も猫になったのだな…。

可愛いけど、お兄ちゃんとしては少々複雑だ…。

とりあえず諸悪の根元たるあのおやぢをしめてくるか。

祐介「にや〜…。

それほし〜…。

早くちょうだい。」

ロリコンおやぢ「可愛い可愛い子猫ちゃん。

このモン○チが欲しいなら一緒に来てほしいんだな。」

祐介「にゆ〜。

行く〜。」

いかん！

急がんとゆーちゃんが○ンプチの…じゃなかった…。

ロリコンおやぢの魔の手に！

ならば奴の出鼻をくじく！

俺は近くにあった電信柱のてっぺんに素早く登り、ふんぞり返ってたんかをきつた。

タ・ツーヤ「までい！」

祐介「にや？」

ロリコンおやぢ「な…なにが起きたんだな？」

タ・ツーヤ「いたいけな幼い少女をだまし、己の欲望のはけ口にせんとする。」

人、それをロリコンと言う！」

ロリコンおやぢ「ロ○・ストール！？」

天空○心拳の使い手なのか！？」

祐介「にゅ〜」。

読者の何割が分かるんだろ？

読者置いてけぼりにしちゃメツ！だよ？」

ゆーちゃんがまだ正気に戻ってないな…。

可愛すぎるぜゆーちゃん！

あと、読者が置いてけぼりなのはこの小説始まってからずっとだから気にしない！

ロリコンおやぢ「誰なんだな！

名を名乗るんだな！」

タ・ツーヤ「貴様に名乗る名前はない！」

フツ…決まった。

祐介「まだそのネタ引っ張るの？

そのうち読者に見捨てられるよ？」

…ゆーちゃん正気に戻られたようで。ロリコンおやぢ「邪魔するんじゃないんだな！

貴様を倒してこの子とニヤンニヤンするんだな！」

ロリコンおやぢが魔力を集中する。

ていうかニヤンニヤンて表現が古いな…。

タ・ツーヤ「技術点だったの5か…。

クズですねえ。」

ロリコンおやぢ「えなり〇ずき風に言うなあ！」

タ・ツーヤ「滅！」

ロリコンおやぢ「あべしっ！」

祐介「まあいいけど最後までネタだったな…。」

達也の冒険〜タ・ツイヤ参上！編〜 (後書き)

第1回 達也なお部屋

達也「ふはははは！
喜べ皆の衆！」

ついに第1回達也なお部屋が始まったぞ！

このコーナーでは読者からの質問や、世界観などを説明するコーナーだ。」

祐介「だれも質問とかしてないけどね。」

達也「ゆーちゃん…。」

いかんともしがたい事実ではあるけども、そんなにはっきり言わなくても…。」

祐介「だって事実じゃん。」

達也「まあそうだけどさ…。」

まあいい…。」

とにかく今回のタ・ツイヤのセリフに出てきた技術点について説明するぞ！」

祐介「一応タ・ツイヤは別人として扱うんだ…。」

達也「技術点とはぶつちやけた話魔法のレベルみたいなもんだ。」

1から始まり100まで上がる。」

これはほとんど例外なく全ての人間に当てはまる。」

祐介「ほとんど？」

当てはまらない人間もいるの？」

達也「うむ。」

神の愛し子にはレベルの限界がない。

あと、普通は技術点は上がっても10前後までで、20こえたらエ

リート、30こえたら英雄、40こえたら伝説級、50以上は間違
いなく歴史に名を残すほどだな。」

祐介「ふうん。」

作者、無駄に考えてるね。」

達也「まだまだ無駄に考えているようだがそれはまた次の機会だな。」

祐介「それではまた次回お楽しみに！」

達也の冒険〜変態 forever 偏〜（前書き）

更新遅れまくってすいませんでした！

仕事の忙しさがピーク&妹の高校受験の面倒で全く時間がとれませんでした。

次回はもう少し早く更新できると思います。

楽しみにしているひと（いねば）は読んで下さい。

達也の冒険〜変態 forever 編〜

ふはははは！

無様な変質者め！

マイ・スウィートシスター ゆーちゃんにちよっかいかけようとするからそんな目にあうのだ！

ゴッドハ○ドスマツシュを決めた後、ロ・ストールが『成敗！』と言った理由が今ならよくわかるな。

と、少々悦に入っていたのだが…。

祐介「あの一…。」
しまった！

ゆうちゃんがそばにいたことを忘れていた！

いくら変装していても、あんな至近距離だと声でバレてしまったかもしれん！

ばいき○まん並みの変装なので普通はバレバレですが、これは超ご都合主義の小説です。

ツッコミいれたら負けです。

祐介「危ないところを助けていただき有難うございます。

オレ…いえボクは早乙女祐介と言います。

こーみえても一応男です。

オマケに高校生です。」

気づいてない！？

やはり俺の変装は完璧なのだな！

身内すら騙せるとは自分の才能が恐くなって来るぞお！

祐介「？」

なんかどこかで会いませんでしたっけ？」

！？つとマズイ！

達也さんではなく、タ・ツイヤとして他人の振りをしなくては！

タ・ツイヤ「おや？」

あなたとは初対面だと思うのですが。

ひよつとしてナンパですか？」

祐介「い…いえ。

そんなつもりでは…。

ただなんとなくうちの兄に似ているなーと思ひまして。」

いやいやいや！

ピンポイントで当ててきましたよ！

どないしょ！

タ・ツイヤ「あなたのお兄さんですか…？」

どのようなお方なのですか？」

だああああ！

何言っているんだ俺は！？

自ら墓穴掘ってどうする！

祐介「うちの兄ですか？」

なんといつか見た目は格好いいんですけど、中身が残念な人です。」

つうこんのいちげき！

タ・ツイヤに255のダメージ！

タ・ツイヤ「そ…、そうなんだあ…。

でも、きつといいところも『無いですね。』…さいですか…（泣）。

「

祐介「顔はすいぶん違いますが、この漫画の主人公みたいなキャラですね。」

そう言っつてゆーちゃんがとりだしたのは、週刊少年チャンプという漫画雑誌だった。

開いたページには、この雑誌で一番人気の無い漫画F U K E Z U

R A H i - S c h o o l

だった。

この漫画の主人公の名前は後園克也。のちそのかつや

やや太めで、ロリコンで、オタクで、人並み外れた怪力を持ち、そして高校生とは思えぬフケ面という以外はごく普通の16歳の少年だ。

ペットにアライグマのオスカル君を飼っている。

ちなみに克也の顔は、ドラ○エのヤ○ガスとガン○ムS○E○Dのア○ランを足して、アス○ンを引いたような顔だ。

真正正銘の16歳なのだが、周りから24留くらいはしているので
は？

ともつぱらの噂だ。

こんな主人公（と脇役達）が引き起こす騒動を描く、読んでもこっ
ちが頭痛くなる作品、それがF U K E Z U R A H i - S c h o
o I だ。

なんか主人公の名前がなんとなく俺に似ているのが腹立つな…。

祐介「まあ、うちの兄はこんな感じですね。」

タ・ツイヤ「そ…そうですね…。」

ずいぶんと変わり者のお兄さんなんですね…。」

祐介「そうなんですよ。」

毎日毎日迷惑かけられっぱなしで。」

…達也さんもう大ダメーシだよ…。」

祐介「だけど…。」

お？

祐介「あ、やつぱりいいところ無いですね。」

ただの変態です。」

まさかの追い討ち!?

タ・ツイヤは死んでしまった!

祐介「でも、優しいんです。」

本人は頑なに否定してますけど。」

タ・ツイヤは復活した!

そうか！

そうだよな！

ゆーちゃんが本気で俺の事きらいなわけないよな！？

祐介「でも変態ですけどね。」

タ・ツイヤ「……………」

祐介「あ！

もうこんな時間。

ボクはもう学校に行かないと遅刻になっちゃいますから行きますね。
先ほどは助けていただき本当に有難うございました。

あなたのお名前だけでも教えて下さい。」

タ・ツイヤ「いや…。」

名乗るほどの名前ではないから。

ではこちらでも失礼するよ。

これからは変質者に気をつけるようにね。」

祐介「はい！

縁があつたらまた会いましょう！」

ゆーちゃんは去っていった。

俺の心にしっかりと大ダメージを与えて。

ち…、ちきしょー！！！！

達也の冒険〜変態 forever 偏〜（後書き）

劇中に出てきた F U K E Z U R A H i - S c h o o l は構想自体は出来ています。

読んでもいいかなという意見があれば書いてみようかなと考えてます。

達也の冒険〜あぢま覚醒？編〜（前書き）

気がついたらPV50000突破してました。

まさかこんなに見てくれている人がいるとは未だに信じられません。
応援していただきありがとうございます。

これからもがんばります！

達也の冒険〜あぢま覚醒？編〜

ふう…。

なんとか（心の）ダメージも抜けたか…。

しかしゆうーちゃん、容赦無かったな…。

時に言葉は刃より鋭いと言うがたしかにチェンソーでガリガリ削られた方がダメージの回復は速いかもしれんな。

さてと…。

学校の方に向かうか。

どうせさつき、タ・ツイヤとしての姿は見られてしまったのだ、普段の達也さんの姿でも構わないだろう。

そんな事を考えながら歩いていると…。

ドシャーン！！！！

ガラガラガラ！！！！

何かが倒れ、崩れる音がした。

いったい何事だ？

今のは凄まじい重量の物体が倒れ、崩れる音だぞ。

もし、その下に誰かがいたら…。

その下敷きになったのがゆうーちゃんだったら…。

いかん！

助けなくては！

ゆうーちゃん無事でいてくれー！

俺は風のように走った。

秒速50mくらいだな。

急いでいたのもあるが、近くに幼女がいたのでな、その子のスカートもめくっていくためだ。

ふむ、くまさんか。（ 犯罪です）

あぢま「ぎー…。」

潰れていたのはあぢまだった。

達也「ふむ。

何事もなかったようだな。」

祐介「いやいやいや…。」

そこでは、巨大な靴箱に潰されたあぢまと、それを眺めるゆーちゃん、玄丈。

そして大量の野次馬たちがいた。

玄丈「立て！

立つんだあぢま！

お願いだ！

立ってくれえ！」

お？

玄丈の願いが通じたのかあぢまが立ち上がったぞ。

あぢま「ギー！（ご心配をおかけしてしまい、申し訳ございません

玄丈様。）」

「ギー！」だけで何故意思の疎通が可能なのだろうか？

あぢま「ギーー！（大久保大介いざ、参る！）」

そつえばそんな名前だったな。

あぢま「ギ？ギー。（あ、おはようございます。）」

今更俺に気づいたのかいきなりあいさつしてきた。

空気読めよ！

玄丈「この！

脳の容量3bitがあつ！

たった今やろうとした事も記憶できんのか！？」

達也「違うな…。」

そいつの脳の容量は3bitではない！

3ミツキーだ！」

祐介「それもつ、容量の単位じゃないから…。」

ミッキー

コンピューターのマウスの移動量と感度を表す単位。
断じて容量を表す単位ではない。

あぢま「ギー。(なんかミッキーという響きがいいのでそっちでいいです。)」

祐介「いいんかいつ!?!」

達也「気に入ってもらってそいつは重畳。」

玄丈「ええい!

あぢま、bitでもミッキーでもいいから本気を出すのだ!

1日1回しか使えぬ、貴様の最大の秘技を!」

なんだそれは?

なんか面白そうだな。

見物していこう。

あぢま「ギーー!(わかりました。

いきます!)」

おおっ!

なんかあぢまがマジな表情になった。

あぢま「!!!」

凄まじい気合いだ。

いったい何が起きるのだ!?

(かっこいいBGM)

(ナレーション)

卑屈の精神が頂点に達した時、あぢまは次元の壁を超え、東西南北中央不敗を呼び寄せるのである。あぢま、東西南北中央不敗と合身することにより、その潜在能力を数十倍に高めることができる。

なんだ今のナレーションは？

あぢま「東西南北中央不敗マスターあぢま参上！」

あぢまが普通にしゃべってる！？

玄丈「みたか、早乙女祐介！」

東西南北中央不敗マスターあぢまとなったあぢまは、戦闘能力は通常
の十倍！（5 50）

頭脳も八倍（3 bit 3 byte）に大幅強化されるのだ！」

なんか元々が低いからあんまり強化されてないような…。

玄丈「まあ、1日1回、5分しか変身できないという制限があるが
な。」

使えな！

あぢま「行くぞ早乙女祐介！」

轟！

なんか変なオーラだしてあぢまは突っ込んでいった。そして、特に
文章に残る事なく破れたのだった…。

玄丈「おのれ早乙女祐介！」

おのれミルキー ユー！

次こそは…、次こそは必ず貴様の息の根を止めてくれる！」
そう言つて玄丈は逃げていった。

今日も学園は平和だな…。

達也の冒険〜あぢま覚醒？編〜（後書き）

結局 F U K E Z U R A H i S c h o o l 読みたいという意見
はありませんでしたが、作者が書きたいので近日中に投稿します。

…まあ、かなり不定期連載になると思いますが…。

達也の冒険FINAL〜漢としての闘い編〜(前書き)

ども、作者です。

相変わらず更新遅くなりました。

ついに達也の冒険編も今回で最後です。

しかし達也はまだまだ活躍します。

では物語をお楽しみ下さい。

達也の冒険FAINAL〜漢としての闘い編〜

ふはははは！

先ほどの闘いでは全く俺の出番はなかったが、今からやる事は俺が中心となってゆーちゃんをからかってやるのだ！

ええと、まず最初にゆーちゃんの現在の行動状態を調べなくては。気配を消して、ゆっくりとゆーちゃんのクラスへ向かう。

ん…？

やけに静かだな…。

扉開けるぞ。

ガラツ…。

誰もいない。

何故？

時間割表を見てみるか。

この時間帯は…、体育か。

…体育だとおおお！！！！

俺の馬鹿やるおおおう！！！！

急がなくては！

このまま行けば間違いなくゆーちゃんのブルマ姿あーんどナマ足を拝める！

さらに女子更衣室でゆーちゃんの着ていた服が手には入る！

こうしてはおれん！

ゆーちゃん、いまいくぞ！！！！

今から達也のやろつとしている事は犯罪です。

絶対にマネしないで下さい。

女の子に嫌われるとか、袋叩きにあうという以前に捕まります。

この作品はあくまで小説です。
現実はこのなにごとに甘くありません。
グラウンドにて…。

お！

ゆーちゃん発見！

周りからみても飛び抜けて小さいからよく分かるな。

な…なんと…。

ぶ…ぶるまだとおおおう！

周りの生徒達はスパッツなのに、ゆーちゃんがいっているのはまじうことなくブルマだ！

しかもわざわざゼツケンに、『1ねん1くみ さおとめ ゆうすけ』と書いてある！

いかん！

このままでは理性を抑えられん！

欲望に任せて暴走してしまう！

いつもしてます。

だが、ちょっとだけ…、ちょっとだけなら近づいて見ても良いよな！？

俺の頭の中で天使と悪魔が闘っている。

達也天使「心をしっかりと持て！

己の欲望に打ち勝つんだ！」

達也悪魔「何きれいごと言ってるんだYO。

世の中にはやりたい事はやれるうちにやるべきなんだZE。」

達也天使「だが、それは時として周りの者達に迷惑を掛ける！

他人を傷つけてまで欲望に身を任せるのは人として最低な事なんだ

！」

達也悪魔「そうはいうがＹＯ。」

オマエはあの姿をもっと近くで見たくないのかＹＯ？」

達也天使「そ…それは…。」

達也悪魔「無理はよくないＺＥ？」

天使さんＹＯ。

要はバレなきやいいんだＹＯ。

なあに俺達ならやれるに決まってるＺＥ！」

達也天使「安〇先生…。」

ブルマが…みたいです…。」

脳内会議にて悪魔が打ち勝った。

達也「ＧＯ！ＧＯ！」

通常の３倍の速さのほふく前進で一気に近づく！

カサカサカサカサッ！

なんだかゴキな気分になるがこれもゆうちゃんのブルマ姿のため！

目標まであと１００ｍ…５０…４０…３０…２０…１０…見えた！

おおっ！

なんたる…なんたる至福！

健康的ながらもきめ細かな太もも！

幼さを全面にだしながらも見るもの全てを魅了するうなじ！

そしてその事を知ってか知らずか無邪気に、そして無防備にはしゃ

ぐゆうーちゃん！

これは…ＣＡＭＥＲＡでしつかりと永久保存しなくては！

パシャ！パシャ！（小説という分野故に音を描写してますが、実際

は達也が改造して音の出なくなったＣＡＭＥＲＡで撮っています。

その辺りをご理解下さい。）

ふむ…なかなか良いものが撮れた。

これでまたゆーちゃんの成長の記録Vol.1・256に新しいページが追加だな。

お？

もう体育の時間は終わりみたいだな。

ゆーちゃんがクラスの女子達と一緒に行動しているということは今から更衣室に行くのだな！

コイツは見逃せない！

俺の頭の中の天使と悪魔も満場一致でGOサインを出したしな！
いざ行かん！

至福の地、更衣室へ！

更衣室にて…。

祐介「ぶるるっ。」

急に強烈な寒気が襲ってきた。

なんだか嫌な予感がする…。

襲ってくる男子と男性体育教師はぶちのめしたし、更衣室にはオレの使える最強の結界を張った。

心配なんか無いはずなのにこの悪寒…。

一体何故…？

竜美「一体どうしたのさ！？」

急にシリアスな顔なんかしちゃって。」

オレの隣で着替えているリトルグレイ…竜美さんがちょっとだけ心配したような顔で話しかけてきた。

祐介「いえ…なんか誰かに見られているような嫌な予感がしたもので…。」

竜美「それってアレじゃないかい？」

祐介「え？」

そこにはクラスの女子達から袋叩きにあっている我が愚兄がいた…。

達也「待て…待つのだ！」

俺はゆーちゃんの裸にしか興味は無い！

しかも俺はまだゆーちゃんの着替えをみていない！

だから…げげるぶあぁっ!？」

最早問答無用の女子達の攻撃。

それはそうだろう。

女の子にとって着替えを覗かれた上に、自分の裸に興味が無いなんて言われるのはこの上なく屈辱的な事だろうから。

竜美「なんか更衣室の入り口あたりで結界に阻まれて身動き取れない所を見つけたんだってさ。」

あのとおり悪は滅びるみたいだから心配無用なのさ！」

結界に粘着性を持たせて正確だったかも。

あの愚兄が全く近寄れないなんてな。

でも、あの愚兄に同じ手は二度と通用しないだろうな。

でもせめて着替えたらオレもとどめを差しにいくか。

その後達也の断末魔の叫びが聞こえたという。

だが…。

達也「2秒で復活！」

相変わらずな達也さんだった…。

達也の冒険FAINAL〜漢としての闘い編〜（後書き）

F U K E Z U R A H i S c h o o l の連載開始しました！
よろしかったらそちらも読んで頂けたらありがたいです。

後悔とは後から悔いる事。でもやっぱりしちゃうのが人の性。(前書き)

申し訳ありません！

アドリブの天使が…天使が降りてこなかったんです！

てんかれっ！の（というか作者の書く小説全般の）書き方は…。

アドリブのみ！

すみません。

石投げないで下さい。

え？

ホントにそれだけかって？

あああ…あたりまえじゃないですか…。

決してYouTubeでHUNTER×HUNTER見てたから書くの忘れてたからじゃ無いですヨ？

とにかく多大なご迷惑おかけしましたが、作者はこれからもアドリブ一本で書いていくつもりです。

変えるつもりはありません。

だって、この方法止めたら作者自身を否定してしまいますから。

後悔とは後から悔いる事。でもやっぱりしちゃうのが人の性。

祐介「ハア……」。

今さらかもしんないけどさあ……、オレ……かなり自然にオンナノコしてる気がするんだよね……。

これじゃあいざ男に戻った時、かなり大変な事になるんじゃない……。

竜美「やほー！

祐介「ちどうしたさ？

なんか元気がないさ！」

祐介「おはよー……竜美さん……。

いや……ちよつとね……。」

竜美「おおっ！

祐介「うちのテンションがめちゃんこ低いのさ！」

祐介「竜美さんは元気ですね……。」

竜美「それが私の取り柄なのさ！

それよりも悩みがあるならお姉さんに話してみるさ！」

本当に竜美さんは元気だな。

何気に義理堅くて根はまじめな人だから相談してみるか。

祐介「それがですね……。

最近、オレ普通に女の子として過ごしているじゃないですか……。」

竜美「ふみゆふみゆ。
それがどうしたのさ？」

祐介「このままだとだんだん心まで完全に女の子になっちゃいそう
で怖いんです…。」

いざ男に戻った時にかなり苦労しそうだし…。」

竜美「なーんだ。

そんな事で悩んでいたりしてたのさ？」

祐介「そんな事って、オレにとってはとても重要な事なんです！」

竜美「何勘違いしているさ？」

私が言ってるのは例え見た目が変わっていようと祐介っちは祐介っ
ちだってことなのさ！」

祐介「竜美さん…。」

竜美「私だってこんな着ぐるみ（リトルグレイ）着てはいるけど、
それで私という人間の本質は変わらないのさ。
だから祐介っちも気にすることないのさ！」

竜美さん…良いこというなあ…。」

リトルグレイに慰められるってのがなんかへんてこりん雰囲気にな
るけど…。」

竜美「それに祐介っちの性格、そんなに変わってないさ！」

祐介「え…？」

どういうことでしょうか竜美さん？」

竜美「よーするに、祐介っちの性格は、元々女の子ぽかったさ。」

祐介「そ…そんな事はないはずです！」

オレは見た目はともかく、性格だけは男らしい性格してたはずですよ！」

竜美「でも祐介っちは元々感情の起伏激しいのさ。」

う…。

竜美「オマケにえっちな事は人一倍嫌いなさ。」

他の男子がえっちな雑誌見ていた時の冷めた視線なんかまさに女子のそれなのさ。」

う…。

竜美「他にもバレンタインデーにはなんだかんだいってクラス全員分（+達也さん）のチョコレート用意してたり、カワイイぬいぐるみをコレクションしてたり、家庭科の調理実習で女子の誰よりも上手だったり、女の子らしさは元々だと思っのさ！」

…なんかいろいろ暴露されて泣きそうなんですけど（涙）

祐介「でも！」

オレはスポーツをやってさわやかな汗を流してましたよ！

全国大会でも名の知れた選手としてテレビで紹介された事もありますし！」

竜美「それは周りから無理やり入れられたラクロス部なのさ。」

仮にも男の娘である祐介っちがなんで出られたのかは不思議でたまらないのさ。」

それは達也が裏でいろいろ圧力かけまくって認めさせたからである。というかそいつらも祐介の魅力に骨抜きにされるといって、前代未聞の事態になり、認められたのだ。

ちなみにテレビ局のインタビュアーは、女子に混じって試合する事が話題になった事による。(本人はその事に気づいてない。)

その後、その可憐な容姿で全国に本人非公認のファンクラブ(会長は達也さん)が出来、名が知れた選手になったのだ。

祐介「確かにそうですけど…。

でも、ラクロスも立派なスポーツです！」

竜美「でも、所属してたのは、『女子』ラクロス部なのさ。」

祐介「うううっ…。」

竜美(ヤバい！)

祐介「ちいぢめるの、超楽しいのさ！」

これは癖になるさ！

なんか今なら達也さんの気持ち、少しだけわかるさ！)

祐介「でも！でも！」

オレは武道だってやっています！

これでも、部の中で一番の腕前なんですよ！」

竜美「それだって、無理やり誘われたなきなた部なのさ！」

アレ…？

もしかして、元々オレって女の子っぽい？

竜美「もしかしなくても元々女の子っぽいさ！」

祐介「うわあああ！
いきなり人の心読まないで下さい！」

竜美「小説の世界だとこんな能力常識なのさ！」

祐介「どんな常識ですか！」

竜美「それは人類永遠の謎なのさ！」

祐介「…もういいです…。」

もうオレは泣く事にします。

祐介「竜美さんのアホー！

いぢわるー！

びえええええ！」

竜美「おお！

祐介「ちがとつとつ頭の中まで見た目相応になったのさ！」

慰めてくれないの？

ねえ？

慰めるなら今のうちですよ？

竜美「祐介「ちー！

いっそのこと、これを装備するのさー！」

ここに取り出したるは赤いランドセル…っておい！

祐介「そもそも今回の話の問題はどうなったんですか！？」

竜美「そんなん決まってるさ。」

祐介「ちは元々女の子っぽかったのさ。」

だから今更少女趣味に染まりたくないというのは、野球選手がボールに触りたくない駄々こねてるのと一緒なことなのさ！」

祐介「それ、どんな野球選手ですか！」

それにオレの話とかみ合ってる…、ってああっ！

もう作者の今回のネタが尽きちゃう！」

竜美「だからこの話はもう終わりなのさ。」

祐介「なんかぐだぐだな終わり方したー！」

あ…いつもの事が…。

後悔とは後から悔いる事。でもやっぱりしちゃうのが人の性。(後書き)

近々F U K E Z U R A H i S c h o o l とのコラボ小説書く
つもりです。

面白く書くつもりですので読んで頂けたら幸いです。

ユニークアクセス10000突破記念！特別企画、てんかれっ！あーんとFUK

てんかれっ！のユニークアクセスがついに10000突破しました。

前回の予告どーり、コラボ小説書きました。

続き書いてという要望あれば続き書きます。

なくても気が向けば書きます。

F U K E Z U R A H i S c h o o l にもコラボ小説載せまし
た。

読んでいただけたらありがたいです。

ユニークアクセス10000突破記念！特別企画、てんかれっ！あーんとFUK

登場人物紹介

名前 後園克也

通称ウルモフ大佐

F U K E K E Z U R A H i S c h o o lの主人公。

フケ面でオタク、さらにロリコンとマイナスな部分しか持たない男。
主人公の癖に脇役属性しか持たない。

名前 和泉尋

F U K E Z U R A H i S c h o o lのヒロイン(?)

かわいらしい容姿を持つ男の娘。

見た目はかわいらしいが空手、剣道、柔道の3つあわせて6段とかなり強い。

性格はDSなのでよくウルモフ大佐に痛恨の一撃を与える。

かなり貧乏で極度の方向音痴。

脇役ながら主人公属性あふれる男。

あーたーらしーいあーさがきたー。

きーばーおのーあーさーだ。

オレは朝からとってもご機嫌だった。

何しろクレインゲームでたった1回でうんみゃい棒100本手に入れたからだ。

こりゃあ今日はラッキーだなと思って歩いていると…。

謎の声「く…食べ物…。」

どこからかうめき声が聞こえてきた。

みるとそこにはかわいらしい女の子が倒れていた。

身長は150cmくらいかな？

透き通るような白い肌とつややかな黒髪、熟れたさくらんぼのような赤い唇…。

一瞬、思わず見とれてしまった…。

女の子「くい…もの…。」

そこでハッと気づく。

きつとお腹がすいて倒れたちゃったんだ。

何か食べ物…とっていると、先ほど取ったうんみゃい棒(x100)が目についた。

祐介「あの…こんなものしか無いんですけど、よろしかったらどうぞ…。」

女の子「ありがとう…！」

ありがとう!というと同時に女の子はうんみゃい棒をむさぼり始めた。

凄い速さでうんみゃい棒(x100)がなくなっていく。

女の子「ゴホッ…ゴホッ!ゴホッ!」

あ…むせた…。

5分後…。

祐介「なんでこんなところで倒れてたんですか?」

女の子「いやはや、人を探しているうちに道に迷っちゃって、なんか違う世界にきちゃったみたい。」

異世界に迷子になるって、マ○キ・ア○ドーじゃあるまいし…。

女の子「あ、自己紹介が遅れましたね。

俺の名前は和泉尋と申します。

助けていただきありがとうございます。」

祐介「ヒロさんですか…。

そして探し人とは?」

ヒロ「コイツです。」

そこには、40過ぎのオッサンの写真が写っていた。

祐介「担任の先生?」

ヒロ「信じられないかも知れないけど、クラスメイトなんだ…。」

なんですと!?!?

これがヒロさんと同い年!?!?

ヒロさんはどう見ても中学生で、このオッサンさ40代にしか見えん!

祐介「何者なんですこのオッサン?」

ヒロ「コイツの名前はウルモフ大佐(本名、後園克也)。

至高のロリを探す!

とか言つてどっか行つたつきり、連絡もない。

だから人様に迷惑かけさせないうちに連れて帰ろうとしているうちに異世界にきちゃったみたい。」

ヒロ「でもまあ、この世界にいるって事は確實っぽいからこれから気長に探すよ。

うんみゃい棒おいしかった。

また、縁があつたら会おうね。

それじゃ。」

祐介「待つて!

だったらその人が見つかるまでぼくん家を拠点に探しなよ。

泊まるあてなんかないんでしょ?

遠慮なんかしないで一緒に暮らそう!

…約一名危険人物がいるから気をつけて。」

ヒロ「そんな悪いよ…。」

祐介「だーかーらー、遠慮しないの！
その代わり家事は分担だよ」

ヒロ「…ありがとう。」

こうして我が家に新しい同居人ができた。
これからきつと楽しいことが盛りだくさんだろう。
とても楽しみだ。

…どっかから『俺の出番は！？』という声が2つ聞こえてきた気が
したが、気のせいだろう。

ユニークアクセス10000突破記念！特別企画、てんかれっ！あーんどFUCK

第2回 達也なお部屋

達也「ふはははは！
喜べ皆の衆！

第2回、達也なお部屋の時間だ！」

祐介「まさか特別企画と被るとはね…。」

達也「今回、初めて読者からの質問があったからそれについて説明するぞ！」

祐介「えーっと…。」

『出雲ちく』さんからのお便りで、

平行世界とはどういうものですか？

魔法の専門学校はあるのですか？

また、あるとして魔力の偏差値みたいなのはあるのですか？

という質問を頂きました。」

達也「ではお答えしよう！」

まず、平行世界というのは、世界樹に生えてる葉が世界で、隣合っ

てる世界はほとんど変わらないが、世界の距離が離れるにつれ、全く違う世界になっていくのだ。

また、作者のオリジナル小説には、必ず宮小路十六夜というキャラが出てくるのだが、このキャラは各平行世界を渡り歩く同一人物だ。てんかれっ！本編にも既に出てきたな。

次に魔法の専門学校だが、もちろんある。

世界の大魔法使い候補を育て、新たな魔法の開発や魔法の改良なども行っている。

魔法の偏差値も当然のようにあるな。

この世界は魔力は平等な分、練度で相当な差がでるからな。

正直、努力でいくらでも補えるから平均値も高めだな。

あと最後に、宣伝っぽくなるが、作者の処女作にして、現在進行形でモバゲータウンで連載中の『ぶるすぱっ！』っていう小説読むとわかりやすいぞ。

この作品だと十六夜もかなり活躍するしな。」

祐介「とにかくてんかれっ！はまだまだ続きます。

これからもよろしくお願いします！」

両親の帰郷1〜お母様が倒せない〜（前書き）

ごめんなさい、更新遅くなりました！

なかなかいいネタ思いつかなくて…。

後仕事も忙しかったですし…。

でも、その分面白くなってると思います！

今回はぶるすぱっ！との繋がりをちょっとだけ意識してみました。

本当にちょっとだけですけど…。

後今回、あの達也すらかなわない人が登場します！

一体誰なんでしょうね？

両親の帰郷！〜お母様が倒せない〜

？「はあーぐうー！」

ギョム！

祐介「によわああああ！？」

突然、俺に何者かが抱きついてきた。

いや、何者かかっていっても分かつちゃいるんですけどね…。

祐介「久しぶりだね。

お母さん。」

そう、今の今まで登場しなかった我が母、早乙女 祐美^{ゆみ}。

そして我が父、早乙女 達幸^{たつゆき}。

2人とも神の愛し子である。

いや、神の愛し子だった。

神の愛し子としての力を失った訳ではない。

むしろ逆だ。

俺の親は2人とも神の愛し子の力を凌駕し、人類の最終段階、聖靈化している。

聖霊化

人類の最終段階とも、超進化人類ともいわれる。聖霊化するには、魔力・知力・体力・財力など、すべてにおいて高いレベルを必要とし、さらに運も必要とされる。

聖霊化することにより、人間という殻から解脱し、人としての限界を無くす事ができる。

また、不老不死となり、永遠の命をも手に入れられる。

しかしこの世界では聖霊化するのに適してないのか、聖霊化した後はあまりこの世界に留まる事ができない。

故にオレの両親は、ごくたまにしか会いに来れないのだ。

裕美「ゆーちゃん、ますます可愛くなつたわね！

おかーさん、嬉しくって会いに来ちゃった！」

ぎゅっぎゅっぎゅっ！

祐介「ちよっ…待っ…。」

あの…お母様…抱きしめ過ぎです…。

苦しいんですけど…。

あ…なんか…綺麗なお花畑が見えてきた…。

あはははは…。

なんか楽しくなってきたよ…。

裕美「…ん！」

声が聞こえる…。

裕美「ゆ…ち…ん！」

聞いてとても安心できる声…。

裕美「ゆーちゃん！

死んじゃダメー！」

祐介「みやつ！？」

裕美「ゆーちゃん…。

良かったあ…。

おかーさん心配したんだよお…？」「

あの…あなたのせいですよね？

自覚してます？

裕美「もー？

急に寝ちゃうなんてヒドイじゃない！

おかーさんさみしかったんだよ！？」

やっぱり自覚なしですか…。

懸命なる読者諸君はお気づきだと思つが、我が母は超がつくほどの天然である。

そして、最もその天然に振り回される哀れな羽虫が蜘蛛の巣に自らかかりにやってきた。裕美「あらたっちゃん！
おかーさん帰って来たわよー！」

そう…我が愚兄、達也である。

達也「げ！

かーさん…。」

裕美「げ？

たっちゃん…なんか変な物でも食べたの？」

達也「い…いや…何でもない。

と…とりあえず、お帰りかーさん、あーんどとーさん。」

達幸「ええい！

実の父親を、オマケみたいな迎え方をするでない！

我が輩はアレか！？

カード入りチョコウエハースのチョコウエハースか！？

カードだけが目的の子供に捨てられるだけの哀れな存在なのか！？」

えー…見ての通り、お父さんは我が愚兄と同じく、顔は良くともとても残念な性格をしています…？

いや…むしろ、あの愚兄すら上回るテンションの高さの分、より残念な人かもしれませぬ。

達幸「うーむ…。」

しかし、本当にますます可愛くなったな祐介！

裕美の若い（幼い）頃にそっくりだぞ！」

ドンッ！

瞬間、なにやら凄まじい覇気が辺りを包んだ。

その覇気の出どころは…。

達幸「ゆ…裕美…？」

裕美「あなた…？」

私はまだまだ若いつもりですけど？」

ヤバイ！

あの状態のお母さんは誰にも止められない！

その怒りが鎮まるのをひたすら待つしかない！

達幸「いや…だってお前…見た目16くらいでも、もう40近いし…。」

ワアアアア！

地雷踏みましたをお父様！

もはやお母さんの放っている覇気は『殺○の波動』みたいなから、『穏やかな心を持ちながら、怒りによって目覚めた最強の戦士』っぽくなっていますから！

…ここはもう、戦略的撤退しかない！

見ると我が愚兄も同じ結論に至ったようだ。

2人でうなずきあうと、同時にその場から逃げ出した。

ごめんお父さん！

あなたの死は無駄にしない！

約1分後、『ぎよぬうえひかたなはまなやまつ！』とかいう、よくわからない悲鳴が聞こえてきたが、聞こえない…。オレ達にはなーんも聞こえない…。

両親の帰郷〜お母様が倒せない〜(後書き)

レジュメ、感想、ご指摘お待ちしております！

両親の帰郷？スーパーハイテンションを習得した父親はウザイ（前書き）

今回は短いです。

両親の帰郷？スーパーハイテンションを習得した父親はウザイ

達幸「ピクニックに行こう！」

祐介「はい？」

達幸「ピクニックに行こうと言っているのだ！」

読者の皆さん、こんにちは。

早乙女祐介です。

役一時間前お母さんによってハンマーで光にされたのにもう復活して、相変わらず途切れる事のないテンションで喋りまくるお父さんはやはり我が愚兄の親といつかなんといつか…。

祐介「いや…だから、なんで唐突にピクニックなのかって事なんだけど…。」

達幸「ふ…。」

知れたこと！

行きたいからに決まっているだろう！」

えーっと…。

殴ってもいいかな？

いいよね？

よし、殴る！

ああ…。

なんか最近他人をいぢめるのが快感になってきたなあ。

達幸「ゆーちゃんがSにめざめたあ!？」

元々ドSだけどね。

さてと、話はそらせたしピクニックは無かったことに…。

達幸「やだやだやだっ!

ピクニックにいーくーのー!」

あーっぜえ!

両親の帰郷〜スーパーハイテンションを習得した父親はウザイ〜（後書き）

ご指摘、感想、レビューお待ちしております。

両親の帰郷FINAL〜親子水入らず〜 (前書き)

遅くなりました！

ヤバい、ヤバいよ。

なかなかネタ、浮かばないよ！

でも、やっぱりアドリブしかないんだよ！

と、いうわけで15分で書き上げました作品をお読み下さい。

両親の帰郷FINAL〜親子水入らず〜

何故オレはこんなところにいるんだろう…？

オレは今、とても広い平原にいたりする。

結局、うちのクソおやぢが駄々をこねまくり、おまけにお母さんまで賛成しちゃったもんだから、断りきれなくて、なんか流されるままにここに連れてこられた。

しかも、お母さんが、『せっかくお出かけするんですもの。ゆーちゃんも綺麗な洋服着て行きましょうね』

と言われ、有無をいわずに着せ変えられた。

ううっ。。

恥ずかしい…。

恥ずかしすぎる…。

今のオレの格好は、無地の白いワンピースに、これまた白い帽子という、昭和臭120%な格好だった。

…デフォルトでこの格好を選ぶって事は、やっぱりお母さん結構なねんね…。

裕美「…ゆーちゃん？」

今、なんかよからぬ事を考えなかった？」

のわあああああ！

心の中を先読みされた！？

オレはぶんぶんと首を振りながらひたすら否定の意を伝える。

こええ…。

本当にこええよ…。

達幸「はっはっは。

やっぱりかーさんも年だなあ。

そーんな時代遅れなファッションセンスじゃがら！？」

裕美「あーなーたー？」

お父さんあんたすげえよ！

マジですげえよ！

その勇氣、リアルでギャルゲの主人公演じるくらいの物に匹敵するよ！

…見習いたくないケド。

ていつか、いい加減学習しようよ！

そんなんだからお母さんから。

リバーブロー？ガゼルパンチ？デンプシーロール

という、幕ノ内〇歩ばりの連続コンビネーションを食らうんだよ。

あの、無駄にハイテンションな愚兄ですら、おとなしく縮こまっているのに！

それにしても本当にお母さんの事苦手なんだな。

いつもは無駄に自信の溢れていたあの顔も、どこぞのギャルゲのヘタレ主人公並みに情けなくなっているし。

なんだかちよつとカワイイかも？

あ、お父さんがついに沈んだ。

どーせ2秒で復活するんだろうけど。

裕美「楽しかったわねー」。

また一緒に行きましょうね。」

あれから、久しぶりに、本当に久しぶりに家族団らんの時間を楽しく過ごした。

約2名、時々怯えていたバカもいたけど、オレには本当に幸せな時間だった。

裕美「でも、残念…」。

もう…、お別れしないといけない時間みたい…。」

聖霊化したお母さんとお父さんは、この世界に留まり続ける事が許されない。

裕美「ごめんね…。」

私は親として、母としてもっとあなた達と一緒にいてあげたかった。

次にいつ会えるかわからないけれど、できるだけすぐに会えるように努力するわ。」

そう言ってお母さんはオレ達を抱きしめる。

お父さんもオレ達の頭に手を乗せる。

ああ…。

やっぱり、どんなにバカやってもこの人達はオレ達の親なんだ。

目をつぶり、その温かさを感じていると、ふっとその温かさが急になくなった。

目を開けずともオレにはわかった。

2人共もう、行ったんだって。

ちょっとだけ目が熱くなったけれど、オレは泣かなかった。

さよならはしてないから。

また、会えるから。

だから…。

行ってらっしゃい。

両親の帰郷FINAL〜親子水入らず〜 (後書き)

なんかラストちょっとシリアス？

みたいな感じになりましたが、次回はやっぱりバカやりますので「
安心(?)」を。

劇中劇！ カードマスターざくろ えびそーど1（前書き）

遅くなりましたすみません。

なかなかネタが浮かばなくて…。

今回は達也のしているテレビアニメという設定の劇中劇です！
お楽しみください！

劇中劇！ カードマスターざくろ えびそーど1

みなさんおはようございます。

私の名前は綾瀬柘榴あやせ けいじゆ小学2年生。

とくいな教科は体育と、かいぼう学。

嫌いな教科は算数。

家族はお母さんとお父さんとお兄ちゃんとの4人ぐらし。

悠梨「ざくろ〜。

誰と話しているんだ？」

いまのは私のお兄ちゃんあやせ ゆうりの綾瀬悠梨、高校1年生。

ずのうめいせき、ようしたんれい、うんどうしんけいばつぐんだけど、とーつつつても残念なせいかくなの。

すぐに私をいぢめるし、私とおふる入っているとペタペタ体さわってくるし、よるおそくまでアニメみてハアハア言ってるし。

でも、そとずらが良いからわりとモテるみたい。

世の中の女の子たちは男を見る目がないんですねえ。

ざくろ「うつん、なんでもないよ。

おはよう、お兄ちゃん。」

…？

なんかお兄ちゃんがもだえています。

気もちわるいからするーします。

なんかお兄ちゃんがお空にむかって

悠梨「全国のオタク野郎共！

あえて言おう！！！！

羨ましいだろうと！！！！」

とか言っています。

林檎「目を合わせちゃだめよ！

あなたはあんな汚れた人間を見ちゃだめなの！！！！」

いまのは私のお母さんの綾瀬林檎。あやせりん

高校生のお兄ちゃんがいるのに、もんどつむようにわかいです。
どうみても中学生にしか見えません。

…ほんとは40近いはずなんです。

林檎「ざくろちゃん？」

なんか今不穏な事考えなかつた？」

お母さんなんか黒いオーラ出てます！！！！

私はひっしでぶるんぶるんと首をふりました。

林檎「あらそう？」

まあいいわ。

とにかく、あなたはあんなのにはなっちゃだめよ。」

と行って、お兄ちゃんを指さします。

悠梨「あの…母上殿…。」

いくらなんでも実の息子に面と向かってそれは無いのでは…？」

林檎「黙れ。」

悠梨「ごめんなさい。」

お兄ちゃんがどげざしてあやまっています。
ぶざまです。

悠梨「妹がトドメさしてきた!？」

棗「今日も我が家は賑やかだなあ!。」

あ、お父さんも起きてきました。

ぞくろ「お父さんおはようございます。」

棗「ああ、おはよう。」

ぞくろは今日も可愛いね。」

ぞくろ「ありがとうございます。」

この、しんしな人は綾瀬棗、私のお父さんです。

林檎「そういえば私もあいさつまだだったわね。

ざくろ、おはよう。」

ざくろ「おはようございます。」

悠梨「ざくろ。」

おは…『黙れ』…ごめんなさい。」

あいさつすらお母さんにそしされるへたれなお兄ちゃんほっとい
て、さっさと朝食を食べましょう。

おなかがすきました

劇中劇！ カードマスターざくる えびそーど1（後書き）

平仮名ばっかで読みづらかったらごめんなさい。

このストーリー、好評でしたら次回に、不評でも時々載せます。

早乙女祐介 小学一年生！ ぷろろーぐ（前書き）

遅くなりました。

前回の番外編の反応が全くないので番外編は時々掲載します。
今回から新章突入です！

早乙女祐介 小学一年生！ ぷるるーぐ

読者の皆さんこんにちは。

早乙女祐介です。

皆さんが見ているのが朝であっても、作者がこれ書いているのが夜であつても、すみませんがこんにちはと言っておきます。

さて、何故こんなよく分かんないあいさつで始まったのかというと…。

達也「ゆーちゃん

どこ行ったのー？

出ておいでー。」

そうですこの馬鹿兄貴のせいです。

この馬鹿兄貴は事もあるうに、

達也「ゆーちゃん！

ちよつと小学校に行つてみないか？」

などとほぎきやがったのです。

こいつはあれか？

オレの体を幼児化しただけでは飽きたらず、心までも幼児化させようという作戦なのか！？

当然オレは全力で抵抗した。

しかし（性格以外）あらゆる面でオレを遙かに上回る能力を誇る我が愚兄にかなうはずもなく、現在こうして戦略的撤退しているわけだ。

んで、ちよつち現実逃避してたわけ。

読者の皆さんホントにスマセン…。

しかしそんなオレを神は見放したようで…。

祐介「んにゃ？」

なんだか急に暗くなった？」

後ろを見るとそこには変態馬鹿兄貴が…。

祐介「にゃあああああ！！！！」

叫んだ直後に思ったね。

めちゃくちゃ驚いたとはいえ、オレはなんて女々しい叫び声を上げたんだ、と。

達也「やつとゆーちゃんを捕まえた…。」

変態馬鹿兄貴に抱きかかえられ、それでも精一杯の抵抗としてじたじた暴れていたオレは、端から見たら微笑ましく写った事だろう。

…当事者はとてもそれどころではないが。

祐介「いやーだー！

なんでオレが小学校なんぞに行かなきゃならんのだー！」

達也「ゆーちゃん。

この状況、端からみたらサボりたがりの子供を無理やり学校に行かせようとしている兄になっってしまうぞ。」

う…。

それはイヤだ…。

達也「まあ聞けゆーちゃん。

今回は俺にしては真面目な話だ。」

自分でそこまで言うって何だろうな…。

達也「ゆーちゃんに行って貰いたいのは、名門中の名門、私立聖マリエル女学園小等部

ここは、由緒正しい名家や、大企業の子女が通う学校なのだ。

オマケに女の子しか入れない。

教師や用務員、ガードマンまで女という徹底ぶり。」

祐介「うん。

今の説明でかなり突っ込みたいところあったけど、話が進まないから我慢しとく。」

とりあえず心の中だけでもツツコミを入れよう。

まず、オレン家由緒正しくもねえし、特に金持ちでもないじゃん！
しかも最近忘れられつつあるけどオレ、男だし！

心の中でオレが思いつきりツツコミを入れてスッキリしてるとまた
我が愚兄は話を続けた。

達也「だが、そんな風に女ばかりで舐められたのか、最近誘拐未遂
事件などの犯罪が多いらしい。
幸い、まだ大事には至ってないそうだが、何回かはかなり危なかつ
たらしい。」

そこでその学園が目をつけたのがゆーちゃんと言う訳だ。」
祐介「オレ？」

達也「うむ。」

高い魔力と戦闘能力を持ち、なおかつ度胸もあって人格者。

さらに元男ながらも現在は女の子。

これほど好条件なら学園が放っておくはずがない！

だからゆーちゃんは私立マリエル学園初等部の一年生として、事件
解決まで頑張って貰う事にした。」

祐介「オレの意見は！？」

って言いたいところだけど今回はしょうがないか。」

達也「うむ。」

幼女の敵を滅ぼすべし！」

祐介「それをあんたが言うか…。」

ジト目で我が愚兄をにらむと、顔に一瞬つつつと汗が伝ったのをオレは見逃さなかった。

…自覚はあるんだ…。

達也「と…とにかく、詳しい話はあちらで聞くとして、今回ばかりは俺が直接動く訳にはいかないからな、せめてサポートだけはさせて貰う。」

ゆーちゃん、このリボンを常に身につけておいてくれ。」

祐介「これは？」

達也「このリボンには、超小型高性能ビデオカメラがついている。さらに発信機、通信機もついているからピンチの時にはオレを呼べ！ いろいろかなる時も駆けつけてやる。」

その一言がとても嬉しくて、安心したのでオレはとびっきりの笑顔で言っただけだった。

祐介「分かった。」

その時は任せるよ『お兄ちゃん』」

達也「!？」

普段からお兄ちゃんと呼べって言ってる癖に、たまに使つと効果は抜群のようだ。

こうしてオレの新たななる冒険(?)が始まった。

早乙女祐介 小学一年生！ ぷろろーぐ（後書き）

ご指摘、感想、レビューお待ちしております！

あと、感想やレビューに制限がかかっている事に気が付いたので、それも全作品解禁しました。

早乙女祐介 小学一年生 そのいちっ！（前書き）

遅くなりました。

いやはや、こんな状況だと、やっぱり新キャラ考えないといけないんだろっなあ…。

自業自得ですね、すみません。

あと、PV100000突破しました！

ありがとうございます！

早乙女祐介 小学一年生 そのいちっ！

祐介「うゝみゆ…。」

オレは今、悩んでいた。

それもこれもうちの愚兄が

く回想はじめく

達也「ゆーちゃん。

学園の人達はゆーちゃんが元々男だと知っているのは学園長を初めとした一部の人間だけだ。

だからゆーちゃんの名前が早乙女祐介だと知れたら余計な混乱を招きかねない。

だからその学園で使う為の名前を考えておくのだ。」

く回想終了く

などと言われ現在名前を考え中なのだ。

いやね、言いたい事は分かるよ。

今回は珍しく正論だし、余計な騒動はこちらとしてもノーサンキューだし。

…でもさあ。

普通、その学園に行く直前に言うか普通！？

確かにオレも考え付かなかったからあまり強く言えないけども、それにしたってもう少しタイミングってのがあると思うんだ！

おかげでバスの中でうんうん唸っているなんか危ない人になってるし。

そんなオレに周りから一斉に刺さる視線。

えーっと…。

逃げていいですか？

男性「あゝ。」

祐介「はみゅっ！？」

いきなり近くのナイスミドルな男性に声をかけられ、ビックリこいたオレは珍妙な叫び声を上げていた。

…はみゅっ！？ってなんだよはみゅっ！？って…。

ナイスミドルな男性「私は一一にのまえと申はじめします。
先ほどからなにやら悩んでいるようなので、声を掛けさせて頂たまきま
した。

お嬢さん、お名前をよろしければ教えていただけませんか？」

うわー…。

この人の名前、作者絶対適当につけたよ…。

2秒でつけましたby作者

ってそうじゃない！

えっと名前…名前…。

祐介「オレの名前は早乙女祐…。」ってオレの馬鹿あ！

この姿の名前を考えている最中にいきなり後に引けなくしてどーす
る！

えっと…祐で始まる名前とは…。

祐介「さ…早乙女祐奈でしゅ…。」

噛んだ…。

—「祐奈ちゃんか。

可愛い名前だね。

でも、女の子が自分の事をオレって言うのはいけないな。
せめて私とか、僕とかにしないとね。」

か…痒い…。

聞いていて痒くなってきた…。

以後、祐介の名前を祐奈として執筆します。

祐奈「えっと、オ…ボクは今日からマリエル学園に編入するんだけど、緊張しちゃって…。」

と、言うことになっておっつ。

ていうか、オレって言おうとしたらめちゃくちや睨まれたぞ…。

え…、もしかしてオレ、しつけさせられてる？

—「ほう、マリエル学園に。

という事は、君が早乙女祐介君か。

ようこそ、我がマリエル学園に。」

祐奈「はえ？」

—「申し送れたね。

私はマリエル学園で唯一の男性で、理事長の…です。
よろしく。」

早乙女祐介 小学一年生 そのいちっ！（後書き）

感想、ご指摘待ってます！

soliaさん、ご指摘ありがとうございます。

きちんと書き直しましたよ。

これからもバシバシご指摘して下さい。

早乙女祐介 小学校一年生 そのにつ (前書き)

遅くなりました。

eco検定があつてそちらに力入れていたので。
すみません。

早乙女祐介 小学校一年生 そのにつ

現在、オレはやたらと豪華な部屋にいる。

いわゆる理事長室であろうが、それにしたって広すぎだ。

だってさ、一部屋で少なく見積もっても50？はあるんだよ？

8階建ての建物の、一番上のスペース全部理事長室に使われている
つてのは正直どうかって思うんだけど…。

まあ、その理事長たる一さんにはすでに会って挨拶してるんだけど、
一応形式的にももう一度会いに来たって訳。

いやはや豪華な建物だよな！。

小等部のくせに、やたらと広くて（一学年につき1階ずつ。
その上に職員室と特別教室の階と続き、最上階に理事長室がある。）
、一度に30人は乗れそうなエレベーターがあちこちにあるし。
グラウンドだって立派なものだ。

3キロ四方はある、広すぎるグラウンドを3つも抱えていやがる…。

でもここまで来ると、全く羨ましくないから不思議なものだ…。

オレの通っていた学校と比べる事自体が間違っているんだらうケド
…。

—「さて…。」

裕奈「んにゃわっ!？」

いきなりオレの真後ろに「さんが現れて、ビビったオレは素っ頓狂な叫び声を上げてしまった。

裕奈「い…いきなり現れるな！」

—「いやはや。

想像以上のリアクション、ありがとうございます。とてつもなく萌えました。」

裕奈「いい年こいたオツサンが萌えとか言っな！」

—「しかし、裕奈さん。

あなたには少し落ち着きが足りないようですね。まあ、元気なのは良い事ですが。」

裕奈「誰のせいだ！

誰の…！！！」

—「さあ？」

裕奈「ムキイイイイイ！！！」

—「H A H A H A H A H A！」

…だめだ、勝てん！

こやつには何をやっても翻弄されて終わりだ…！

—「流石私の弟子の弟、いや妹ですね。

とてもいい反応です。」

…ん？

弟子…？

裕奈「あ…。」

—「ん？

何だい？」

裕奈「弟子っていうのはもしかしてウチの愚兄の事ですか？」

…できれば間違いであってほしい…。

—「その通り！」

いかにも君の兄上である早乙女達也氏は私の弟子なのだよ！」

裕奈「…一応聞きますケド、一体何の弟子にとったんですか？」

誠に…、誠に如何な事ではあるが、我が愚兄、達也は性格以外は完璧な超人だ。

頭脳明晰、容姿端麗、運動神経抜群は当たり前。

謎の権力を握っているようであり、各国のトップ達ですら自らの飼犬とし、おまけに世界中にほとんどいない神の愛し子でもあるのだ。

生半可事では弟子入りなど必要ないはずのアレの師匠となるからに

は何かしらの極意を極めているはず！

― 一体何の師匠なんだ！！！！

― 「生き様…かな？」

裕奈「はい？」

― 「自分で言うのも何だが、私は紳士であると自覚している。」

… 本当に自分で言うことじゃないな…。
紳士であることには依存ないケド。

― 「だが、同時に私は自由を愛する心も忘れてはいない！」

ふむふむ…、ご立派な事で。

― 「自由！」

それは己が心の中にある欲望を解放する事でもある！」

アレ…？

なんか話に変な方向に…。

― 「故に私は考えた！」

人としての戒律を守り生きる紳士としての生き様と、己が欲望を解き放ち生きる自由人としての生き様を両立させる生き様を！」

…めっちゃ相反してる生き様やん…。

—「そして私は開眼した！」

自由人と紳士との融合した生き様！

変態紳士をだ！！！！」

…さてさてまてえーい！！！！

—「私は変態紳士としての厳しい修業を己に課し、20年にも及ぶ苦行の果てに3つの事を極めるに至った！」

1つ！

ありとあらゆる性癖を持ち極める事！

2つ！

それを自制し、コントロールする事！

3つ！

さらに紳士としての心を忘れない！

この3つを極める事により、私は変態紳士としての生き様、名付け
て《変紳道》を開眼したのだ!!!!」

…よーするにだ…。

ウチの変態兄貴はこの変紳道とやらに入ったせいであの性格になっ
たと？

確かに数年前まではやたらとテンション高くて、ブラコンだったケ
ドロリコンじゃあなかった。

すなわち…。

—「まあ、彼はまだまだ修業不足で変態としてはまだロリコンしか
極めて無いけどね。」

裕奈「キ…マ…せ…か。」

—「ん？」

裕奈「キサマのせいかなぁあああああ……!!」

痛いなあ……もお……。」

生きてた！？

早乙女祐介 小学校一年生 そのにつ (後書き)

ご指摘、感想、レビューお待ちしております。

早乙女祐介 小学校一年生 そのさんっ (前書き)

すみません、ものすごく遅くなりました。
でも、呼んでくれたらとても嬉しいです

早乙女祐介 小学校一年生 そのさんっ

祐奈「なんで生きてんのアンタ…？」

—「アレ…？」

もしかして殺す気満々でした？」

祐奈「うん（一片の曇りもない良い笑顔で）」

—「そんな良い笑顔で肯定されても…。」

祐奈「そんなこたあどーでもいいからさっさと説明しろ」

—「なんかどんどんキャラが変わってきている気がしますけどまあ良いでしょう。」

可愛いから許します。」

私が無事な理由ですか？

簡単ですよあなたの力を上回る力で結界障壁を張っただけです。

…まあ、それでもかなりの被害が出たのには、流石は神の愛し子と
いったところでしょうか。」

祐奈「！？」

なんでその事を知っているんだ！？

オレは一切神の愛し子の事は喋ってないのに！

—「どうして自分が神の愛し子とばれたのか分からないって顔しますね。」

簡単ですよ。

私も神の愛し子ですので。」

なんですと!?!?

祐奈「そんな馬鹿な…。」

神の愛し子の顔は全員知ってるがあんたはその中にはいなかったはず。」

—「まあ、正確に言えば元、神の愛し子ですけどね。」

祐奈「?」

—「まあ、私は神の愛し子としての力と生き方を棄てたんですよ。そういった意味ではある意味あなた方と同じですね。」

あまりその事には触れてほしく無いのか、—の表情は心なしが暗く見えた。

—「まあ、それはそれとして、力を棄てたとはいえ、腐っても元、神の愛し子だったもんで、これくらいのマネはできる訳なんですよ。最も、いまのでガス欠ですがね。」

つくづく凄いのか凄くないのか分からない人だなあ…。

ふと、一は時計を見て

一「おや、もうこんな時間だ。

祐奈さん、私は今から所用があるので失礼しますが、私の代わりに学園内の案内などを頼んでいる方がいますので、その方の後をついて行って下さい。」

祐奈「どんな人なんだ？」

一「この学園の代表者とも言いましようか…。

まあ、分かりやすく言えば生徒会長のようなものです。とても優秀な方ですよ。

まあ、人格的には若干問題がありますが…。」

いやいやいや！

そんな人を代表者にしたらダメでしょ…！！

一「あ、あとこの学園にはあなたが元男性である事を知っているのは私だけです。バレないように頑張ってください。」

じゃっ！

つとばかりにポーズを決めてドアに手をかけた一だったが…。

？「どえりやあああああつつつつつ！…！！」

どぐわしっ!!!

ものすごい勢いで開かれたドアに吹き飛ばされた。

具体的には50mほど吹き飛んだ後、8回ほどバウンドし、動けなくなつた。

ホントにもう限界だつたんだな…。

?「くおつらクソおやぢ!!!」

あたしを呼び出したあ、どういふ了見だ!!!」

そこにたっていたのは、12歳くらいの幼い少女だつた。

全体的に可憐で華奢、箸より重いものは持った事の無いような細い腕。

白すぎず、健康的な肌。

幼いながらも意志の強そうな目。

そして何故か胸だけは小学生とは思えぬほどの存在感を醸し出していた。

多分80近くあるな…。

自分の胸と見比べて何故か微妙に虚しくなった。

—「痛つつ…」。

そついつつも指定された時間の5分前にくるあたり、本当に律儀ですnee立花さん。」

瞬間、立花と呼ばれた少女は一気に赤面した。

…ん？

立花？

立花「うつ、うるせえ！／＼／＼／

いつ来ようがあたしの勝手だろうが！！！」

…立花つて…いや…まさかな…。

それにしても、言動はともかく中身は良い人みたいだ。

—「相変わらずツンデレですnee立花大雅さん。」
たちはな たいが

大雅「下の名前で呼ぶなあー！！！」

げきよっ…。

「あるぼすっ!?!」

あれ…?、なんか今人体から聞こえてはいけない音がした…のような…。

怖いから見ないけど…。

その後、オーバーキルな追撃を一に与えまくっていた大雅だったが、ふとオレの方向を見ると手を止め、一を放り捨てて近づいてきた。

大雅「嬢ちゃんなんでこんなところにいるん？」

ここは危険だからさっさと立ち去った方がいいよ。」

主に一の命が危険です大雅さん。

一「ああ、彼女は今日からこの学園に転入してきた早乙女祐奈さん。見ての通り一年生に転入するんだけど、私は予定があるから君に案内を頼もうかと思ってね。」

その話を聞くと、大雅さんは若干居心地悪そうに頭をかき、

大雅「あたしにも予定つてのがあるんだけど…。

お姉ちゃんと猫達の晩御飯用意しないといけないんだけどな…。」

お姉さんと猫を同類に並べちゃいますか。

—「駄目かい？」

残念そうな—を見て、大雅さんは

大雅「あーっもう！

分かったよ！

だけど手短にだけだぞ！」

この人絶対捨てられた猫とか見捨てらんないタイプだな。

早乙女祐介 小学校一年生 そのさんっ (後書き)

感想やレビュー もらえたらもっと嬉しいです

早乙女祐介 小学一年生そのよんっ！（前書き）

スイマセン、とりあえずもう申し開きできるレベルじゃ無いんですが遅れました。

ネームが浮かばず更新できませんでした。

いやまあリアルでの事情もあるんですけどね…。

しかも今回ほとんど話進んで無いですゴメンナサイ…。

早乙女祐介 小学一年生そのよんっ！

裕奈「……………」

大雅「……………」

「が去り、なんとなーく気まずい雰囲気になり妙な沈黙が場を支配する。

裕奈「えっ…と…。」

スイマセン、めっちゃ気まずいんですけど…。
だ…、誰か何とかしてえっ！

いかんいかん…。

オレは見た目は兎も角中身は大人なんだ！
そう、コ〇ン君も真っ青な経験もたくさんしてるオレが自力で切り
抜けなくてどうする！

オレが決意新たに心の中で気合いを入れたその時。

大雅さんがスツと手を差し出してきた。

大雅「あたしの名前は立花大雅。

6年3組で姫百合会の会長をやってる。」

裕奈「？」

えつと…。」

大雅「自己紹介だよ、自己紹介！」

お互い、あのアホ（一の事）のせいでなんか気まずくなっちまったが、ここは年上のあたしがしつかりしないと！
つて何で泣く！？

先に言われたのが悔しかったのか！？」

…ちがうもん！

…オレの方が年上なんだもん！

…悔しくなんか無いんだからね？

裕奈「早乙女裕奈です。」

今日から、このマリエル学園に転入する事になりました。
よろしくお願いします。」

大雅「おおっ！

まだちつこいのにしつかりしてるじゃねえか！

でも、あたしと話す時はその他人ぎょうぎな喋り方は止めてくれ。
むず痒くつていけねえや！」

ケラケラと人なつつこい笑みを浮かべてポンポンっとオレの頭を軽く叩いた。

…うん、お嬢様学校の生徒としてはどうなのかと思うけど、オレはこの立花大雅という人物が気に入ったな。

裕奈「大雅先輩よろしくお願いします。」

大雅「だから堅苦しいって。

それにあたしのこては大雅でいいよ。

みんなそう呼ぶからな。」

裕奈「わかったよ。
よろしく、大雅！」

とびつきりの笑顔で応えらるとなやら大雅の様子がおかしい。

大雅（やばい…。

めっちゃカワイイわこの子。

あたしはあの人一途なのになんとか揺らぎそう。

あの馬鹿（一の事）が気に入る訳だな。

なんか守ってあげたくなるっていうか…。）

裕奈「どうかした大雅？

なんだか様子が変わりだけだ」

大雅「！

何でもない！！

何でもないからな！！！」

やっぱり様子がおかしい気がするけど、本人が何でも無いっていうんだから気にしないでおこう。

裕奈「そついえばさっき自己紹介した時に言ってた姫百合会って何？」

とりあえず無難な会話でこの微妙な空気を吹き飛ばそう。

大雅「あ…あぁ。

生徒会…って言っても裕奈ちゃんの年じゃ解んないか。

つたく、あのマヌケ（一の事）ちゃんと説明くらいはしてやがれ
つての！

まあ、分かりやすく言うと生徒の代表つてところかな。

…まあそれ以外にもいろいろあるけど…。」

最後のつぶやきは小さすぎて聞き取れなかったが、なんとなくいいたい事は分かった。

でも、ちゃん付けはやめてほしい…。
思わず怖気が走ってしまった…。

大雅「まあ、入ってきたばかりだし、最近物騒な事件とか、変態（一の事）やられているけど、何も心配しないで楽しく過ごせや。

なあにこの学園の奴らはみんな気のいいやつらばかりだ、すぐに友達できるさ。」

そういつてオレの頭に手を乗せ良い子良い子した。

裕奈「ほわあ〜。」

って、オレ、今めっちゃ気持ちよくなってたよね!?

ヤバい、本格的に幼児退行してきてる気がする。

さっさと今回の事件解決して、元の姿に戻らなくては!

早乙女祐介 小学一年生そのよんっ！（後書き）

とりあえず裕奈がそうそう元に戻る事はないので安心（？）して下さい。

早乙女祐介 小学一年生そのごっ！（前書き）

低クオリティながらとりあえず更新出来ました。
楽しんでいただけたら幸いです。

早乙女祐介 小学一年生そのついで！

大雅「ここがみんなが食事をとる言わば学食だな。生徒全員が同時に食事をとる様はなかなか壮観だぞ。」

こんにちは早乙女祐介です。

只今、大雅に学園案内をしてもらっている最中です。現在地は食堂なんですけど…。

裕奈「でかい…。」

そう、とてつもなく大きく、広いのだ。

シンプルなデザインながらも最高級の腕の匠によるものと思われるテーブルや椅子。

白を基調としながらも、さりげなく優雅な内装。

直接は見えていないが、恐らく雇われたシェフも給仕も超一流なのだろう。

真の一流だけがまとえる空気がここにはあった。

だがしかし…。

裕奈「なんで名前が”料亭 国土無双”なんだ…。」

優雅な雰囲気ぶち壊しな名前に思わず突っ込まずにはいられなかった。

大雅「ああそれ…。」

それはあの駄目人間（一の事）のセンスだ。

ほとんど全てにおいて完璧な癖に、性格とネーミングセンスだけは

異次元なやつだから余り気にするな。
それが生活の知恵だ。
すぐなれる。」

小学生にそこまで言われる一が少々可哀想に思えてきた。
自業自得だから一切同情の余地ないけど。

その後も体育館や図書館、武道館のような共用施設から、開発室や映画館やら酒蔵まで、だんだんと怪しくなっていく施設まで幅広く紹介して貰った。

さて、案内も終わり、お礼を言おうとした時。

ちやくらちやらちやらちやら

ゴッド○アーザー愛のテーマがどこからか流れてきた。

みると大雅のケータイがなっているようだ。

大雅は「ちょっと失礼」と言って、少し離れたところで電話に出たようだ。

…というかゴッ○ファーザー愛のテーマを着メロにしてる小学生って…。

と内心ツツコミをいれていると、電話中の大雅の声が聞こえてきた。

大雅「なんだと!!!」

ドラゴンビュートイー、現状は!?!」

どらごんびゅーてぃー？

なんですかソレ？

食べられるの？

大雅「キツいなそれは…」。

つてまさかドラゴンビューティー、コード“リトルグレイ”解除するつもりなのか！？」

コード“リトルグレイ”つてなんだろ…」。

大雅「それほどの相手か…」。

分かった、お姉ちゃんあたしもタイガービューティーとして出撃する！！！」

ドラゴンビューティーとは姉妹なのですか…」。

なんて思考の渦でウンウンうなっているうちに電話は終わったらしく、こっちに戻ってきた。

ヤバイ！

どんなリアクション取れば良いのかわかんない！

どないしょーと考えていると大雅が

大雅「スマンけどちょっと野暮用が入ったから今日はここでお別れかな。」

あなたにとってそれは本当に野暮用で済ませられる物だったの！？

オレの困惑した表情を違う意味に取ったのか大雅は優しい目で微笑み

大雅「そんな捨てられた子猫みたいな目で見るとな。」

大丈夫、明日にはまた会えるさ。

だってあたし友達だろ？」

大変良いセリフなのですが、オレのいい事はそうじゃないんですけど…。

まあ、今は話してくれそうにないし、ここは素直に引き下がっておくか。

オレがこくりとうなずくと、大雅はとびっきりの笑顔で「じわな！

また明日。」と言って去っていった。

なんだか忙しい人だけ悪い人じゃないし、これから友人としてつきあうにやら障害を持たない人だな。

これは明日から楽しそうな毎日が送れそうだな。

…でも本当にドラゴンコンピューターとかなんなんだろ…。

早乙女祐介 小学一年生そのごっ！（後書き）

ドラゴンピューティーって安直すぎたかなー…？

早乙女祐介 小学一年生 そのろくっ！(前書き)

おまたせしました。

今回あの人再登場します。

早乙女祐介 小学一年生 そのろくつ！

祐介「ふい〜…」。

今日はいろいろあつて疲れた…。」

今日は濃ゆ過ぎる人たちに振り回されて疲れたよ…。
さっさと用意された寮の部屋に行ってもう休もう…。

てな事を考えながら歩いているうちに寮についたんだけど…。

うん…、ついたんだけど…。

でか過ぎでしょこの寮。

寮ってうかもはやビルだよこれじゃ…。

はっきりいって大き過ぎて逆に不便じゃないのかなこれじゃ…。

こんなん建てて学費だけで採算とれんのかなー…？

…と、オレが寮の扉のところまで来たところで、どこからか声が聞
こえてきた。

「早乙女祐奈様ですね、ただいま寮長がお向かえに向かいますので少々お待ち下さい。」

…あくまで寮と言いつ張るわけね。
まあいいけど…。

しかし、人工知能搭載の寮とは新しすぎる発想だな。
ある意味鉄壁のセキュリティといえるな。

とか思っているのがチャリと寮の扉が開いた。

どっかの変態「はーっはっはっはー！

はるー！

会いたかったぞおゆるーちゃん！」

…ぱたん

オレは無言で扉を閉めた。

なんだか知らないが有り得ないものを見てしまった気がする。

…いや、大丈夫だ…。

真っ昼間から変態なんぞ出てくるはずがない！

オレは意を決してまたガチャリと扉を開けた。

見知らぬ変態「どーしたのだゆるーちゃん！

大好きなお兄ちゃ…」

バタン！！！！

ぜはーっ、ぜはーっ、ぜはーっ…。
…なんだろう。
なんだか目の前の現実を脳が理解するのを必死で拒否している気がする…。

よし！

こうしてじっとしててもらちがあかん！
とりあえず開けよう！

取り返しのつかない事になったとしてもその時はその時だ！
オレはやらないで後悔するよりやって後悔するタイプなんだ！
蛇だろうと鬼だろうと出てくるが良い！
全て返り討ちにしてくれる！

ガチャリ！

兄という名の変態「全く恥ずかしがり屋だなあゆーちゃんは。ちよっとお兄ちゃんに会えなかっただけでそんなに慌てるだなんて。でも、そんなゆーちゃんが可愛いよ」

… やって後悔しました。

… とりあえず言いたい事はたくさんあるが、今一番言いたい事は…。

祐奈「なんで貴様がこんな所にいるんだ!？」

「ここは女子寮なんだぞ!」

そう、オレの前に現れたのは、世紀の大変態にして万年発情男たる、稀代のペドフェリアわが愚兄早乙女達也だった。

達也「せっかくの再会なのに最初にくみ交わすことがそんな事とは悲しいな。

だがゆーちゃんが気になって気になってしょうがないって顔してるから教えてあげよう。

単純な事だ。

それは俺がこの寮の管理人だからだ!」

… なん… だと…?」

思わず某オレンジ髪の死神みたいな聞き返してしまうほどの衝撃的な事実。

というか、オレを妙にあっさりと送り出したのにはこんなカラクリがあつたからか！！

ていうかあの又ケサク（一の事）はいったい何を考えているんだ！

稀代のペドフェリアたるうちの愚兄を幼女達の住む女子寮の管理人にするなんて！

こんなの、無垢な仔羊達の群れの中に飢えた狼を放つようなもんだぞ！

理解できん！

なんでこんな危険人物を！？（？一応自分の実の兄）

…ああ、同じ変態だからか…。

…つて、納得できるかああああっつつつ！！！！

こんな変態をこんな場所に置いたら、未来ある子供達に凄まじい悪影響を与えかねん！

反面教師にするにしても、情操教育に悪すぎる！

祐奈「ここは貴様のような変態の来るところではないっ！

周りに迷惑掛けないうちにさっさと帰れ！」

達也「ふっ。

ゆーちゃん、なにやら勘違いしているようだが、俺は昔からここで
管理人として働いていたのだ。

すなわち、ここの女の子達はみんな俺の事を知っているし、特に非
行に走る事もなくまっすぐに成長している。

それに最近は、思春期真っ只中の女の子達から相談に乗ってほしい
と頼まれる程でな、いまや俺はこの寮に必要な存在と化して
いるのだ！」

…このやろう、何の仕事していたのか知らなかったがこんな事やっ
ていたのか…。

仕事…趣味ならそりゃあ一生懸命やるわな…。

恐らくゆっくりと外堀から埋めて行って心の隙間にはいりこんでい
ったんだろうな。

…いかん、このままではいたいけな少女達が変態の餌食になってし
まう！

こうなったらオレが内側から女の子達を魔の手から護らなくては！

早乙女祐介 小学一年生 そのろくっ！（後書き）

やっぱり達也さんが出てくると書く方も楽しいです。

作者の言うこと全く聞かずに暴走しちゃったんですが…。

早乙女祐介 小学一年生そのななっ！（前書き）

あけましておめでとつごぞいます？
今年もよろしくお願いします！

早乙女祐介 小学一年生そのななっ！

達也「では俺がゆうちゃんを直々にエスコートしてあげよう。」

馬鹿がなんかほざいていた。

祐奈「うるせー！

オレはひとりで行くから付いてくんな変態！」

達也「ほほう…。」

ゆうちゃんはこのだっ広い寮をひとりで歩いて迷子にならない自信があると？」

祐奈「う……。」

達也「そもそもゆうちゃんは部屋番号を知ってるのかな？」

祐奈「う…う…。」

ヤバい…。

このままではこの変態に主導権を握られてしまっ…！
かくなる上は！

祐奈「うるせー！

さっさと部屋番号教えやがれー！！！！」

必殺、実・力・行・使！

オレの全魔力を注ぎ込んだ必殺の蹴りを放つ！

パシッ。

しかしオレの全力の攻撃はあっさりと受け流され、足をつかまれてしまった。

達也「はっはっは。

ゆーちゃんまだまだ修行が足りないぞ。

この俺に実力行使にできるならせめて今の10倍は実力をつけないと不意打ちですら一本取れないな。

224

…っなんと縞パンだとおおおっっ！？
げぷわっ！」

…今のは変態がオレの足つかんだあと、スカートの中を覗きこんで興奮したとこにオレの急所付きが決まったところだ。

油断大敵っていうか、実力があるのか無いのかわからないっていうか…。

あの後オレは結局捕まり、馬鹿兄貴と一緒に部屋に移動中だったりする…。

急所蹴り上げても2秒で復活ってこいつは本当に何なのか本当に分からなくなってきた。

祐奈「ところでオレの部屋は何号室なんだ？」

オレは至極真つ当な質問をしたのだが…。

達也「はっはっは、ゆうちゃん言葉遣いはもっと女の子らしくないためだぞ（キラッ？）」「

祐奈「質問に答えやがれー！！！」

達也「たしか一人称もオレからボクに変えたのでは無かったのかな？」

…なんでその事を知ってやがる。

達也「俺個人の趣味としては語尾に〜ですうとか、〜ですのとかつけるのは良いと思うのだがどうだろう？」

殺しても良いかな？
良いよね？

祐奈「死ねえええゴラアアア！！！」

しかしやっぱりあっさりと受け止められてしまった。

くそう…。

中身は完全に変態のくせに、油断も隙もない奴め…（一部例外除く。

）
達也「ゆーちゃんはどうも怒りっぽいな。
カルシウムが足りないのか？」

誰のせいだ誰の！

達也「ゆーちゃんの部屋は5727室だな。

57階と結構遠いが何、少なくとも階層は転移魔法陣で一瞬だ。

一度通つてしまえば迷うこともあるまい。

トイレ、バスルームは各部屋完備出しな。

一応大浴場もあるから利用したくばすると良い。

後、食堂は各階ごとにあるからあとで連れて行ってあげよう。」

馬鹿兄貴は意外とその後はまともに案内をして、実にスムーズに進んでいった。

…馬鹿兄貴とはいえ一応ちゃんと感謝はしとかないとな。

祐奈「そ…その…。

…ありがとう…。」

達也「ゆーちゃんもえー！！！」

祐奈「萌ゆーな！」

達也「この程度の事で感謝は良いぞ。

この寮の事なら寮生ひとりひとりの顔や名前、生年月日、好き嫌い、成績、お風呂の時どこから洗うのか、好みの下着の柄、その日はい

ている下着の柄まで全て網羅しているからな！」

なんかだんだんアウトな方向にいったっていったるような……。
とりあえず……。

さっきの感謝の念を返しやがれゴラアアアア……！！！！

早乙女祐介 小学一年生そのななっ！（後書き）

新年の最初っから達也さんの変態さが爆発してしまい、すみません
でした。

早乙女祐介 小学一年生そのはちっ！（前書き）

またしても大変遅れてしまい申し訳ございません！

一応言い訳させて頂くと投稿用のケータイがぶっ壊れてしまい、修理が終わるまで投稿できなかつたっていうのもあるんですが…。

とにかく申し訳ございませんでした！

しかも今回低クオリティかつ短い…。

言い訳のしようもございません…はい…。

早乙女祐介 小学一年生そのはちっ！

っ…疲れた…。

なにがかなしゅーて自分の部屋に行くのにこんなに疲れんといけんのだ…。

それもこれもあの馬鹿兄貴がいろいろとちょっかい出してくるからいかなのだ！

世の中から変態は全て排除すべきだと思っなうん！（ そんなことしたらこの世界の人物の九割方排除されます。）

…とにかく今日はもう疲れた…。

あいさつ周りとかまただけど、今日はもう寝よう。

……………。

だれかがオレの部屋の前にいるな…。

恐らくは2人…。

1人は完全に素人だな。

問題はもう1人の方がコイツは間違いなくアイツだな。

ガチャリ。

扉が開いた。

その瞬間、オレは問題のある馬鹿に花瓶を投げつけてやった。

よく見知ってる変態「qあwせdrftgyふじこ1p!？」

見事に花瓶はうちの馬鹿兄貴に直撃した。

これで少しは静かになるなと思い、もう一人の方を見た。

小学一年生くらいだろうか。

金髪碧眼のおっとりとした感じの可愛い女の子だった。

あ、いやオレはロリコンじゃないぞ？

なんて言うか思わず守ってあげたくなるような、そんなオーラが溢れているんだ。

世の中全ての悪意からさらされずに生きてきました的な感じ？

つまりそんな女の子があの変態と一緒に行動しているということは…。

達也「二秒でふっか…」

裕奈「死ねえ!!！」

「ぐすっ…！」

達也「ぎにゃああああっ…!!」

ふう…。

変態が復活する前にしっかりとトドメを差してやった。

裕奈「悪は滅びた…。」

とまあ感慨にふけっていると、その女の子は青い目を白黒さとしてオドオドしていた。

あ…怒りで忘れてた…。

裕奈「ゴメンゴメン。」

いろいろと見苦しいもの（達也）見せちゃったね。
もう安心していいよ。

悪（達也）は滅びたから。」

温室育ちの女の子にグロいもの（達也）見せてしまったよ。
オレもまだまだ配慮が足りないな。

女の子「大丈夫ですか!？」

お兄ちゃん!!」

オ・ニ・イ・チャ・ン？

この変態はいたいけな少女にそんな風に呼ばせるように強要しているのか？

この子は変態兄貴にいいように弄ばれているのだな？

釈明の余地はないな。

トドメは刺したけどどうせ生きているんだろうし、もう少し痛めつけておくか。

と思い、近づいて行ったら…。

女の子「ひどいです!!

いきなりお兄ちゃんに何て事をするんですか!!!!」

アレ…？

なんでオレが非難されているのだ？

オレはこの子を助けてあげようとしてたのに…。

達也「それは俺が説明しよう!」

裕奈「にやっ!?!」

女の子「きゃっ!?!」

達也「む？

どうしたのだ2人共？

鳩がツイ バスターラ フル喰らったような顔をしているぞ?」

い…、いきなり復活するんじゃないねえ!!!

びっくりしすぎてちよっぴりちびっちゃったじゃないか！（涙目）

…っかいたいだんな顔だよ…。

早乙女祐介 小学一年生そのはちっ！（後書き）

ゆーちゃん若干病んじやった？

なんか達也どころかほとんどのキャラクターが作者の言うこと聞いてくれない…。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5402i/>

てんかれっ！

2011年2月13日07時08分発行